石川県小松市大杉谷川流域の方言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kato, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000135

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

石川県小松市大杉谷川流域の方言

加藤　和夫

1．はじめに

2．大杉町方言の概要

　2.1 音韻

　2.2 アクセント

　2.3 文法

3．大杉町方言の語彙

4．大杉町方言の待遇表現

5．大杉町方言の自然談話

6．大杉谷川流域の方言分布

7．おわりに

1．はじめに

本稿は、筆者が小松市立博物館方言調査委員会の委託を受け、1996（平成８）年度より５ヶ年計画で開始した小松市全域の方言調査の初年度の調査報告である。現在の計画では、小松市内を鍋谷川流域、滓上川流域、大日川流域、郷谷川流域、大杉谷川流域、梯川流域、日用川流域、日本海沿岸域、旧小松町域、旧北国街道沿線域の10のエリアに分け、５年間で全域の調査を完了する予定である。

小松市は次頁「調査地域図」の左下図のとおり石川県の南部に位置する。北を根上町、寺井町、辰口町、東を鳥越村、尾口村、白峰村、南を福井県勝山市、西を山中町、加賀市に囲まれ、面積は371.13平方キロメートル。東南部の山間地域から中央の平野部、さらには日本海に面する海岸部と、変化に富んだ地勢を見せる。石川県内唯一の空港である小松空港を擁し、石川県の空の玄関としても重要な役目を果たしている。人口は107,766人（1993年１月現在）である。

川本栄一郎（1983）などに載る石川県の方言区画図によれば、石川県内の方言は概ね河北郡と羽咋郡の境でまず北の能登方言と南の加賀方言に二大区分される。加賀方言はさらに金沢市を中心とした北加賀方言と松任市・石川郡以南の南加賀方言に分けられる。小松市方言は、その南加賀方言の中でも、加賀市と江沼郡を含む湖南方言に対して松任市・石川郡・能美郡の方言とともに湖北方言に含まれる。

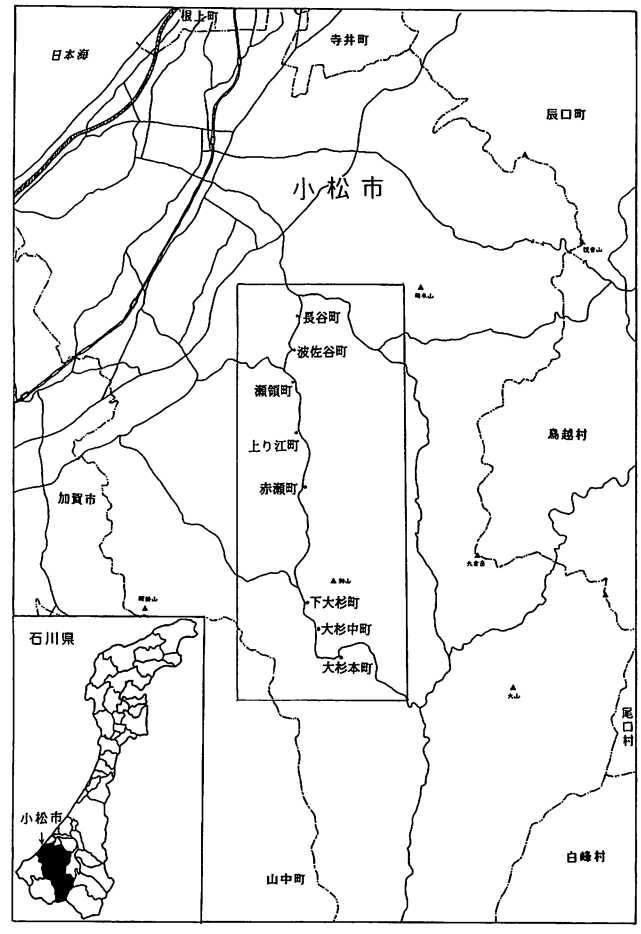
小松市方言調査の概要は次の通りである。まず伝統的方言の記録・保存の観点から、毎年１～２箇所の重点調査地点を定め（今年度は大杉谷川流域の最上流部の大杉町）、老年層話者を対象に、音韻（アクセントを含む）、文法・表現法等の体系的記述と方言基礎語彙（約3000項目）の記述、さらには自然談話資料の録音と文字化を行う。また市内の方言の地域差を言語地図（方言地図）の形で視覚的に示すための言語地理学的調査（調査項目約100項目）を５年間で市内100地点余りの集落で実施する。さらに、方言変容の実態を明らかにするために、市内中心部において世代別・性別の多人数調査を実施する。今年度の実施内容を含め、現時点ではおおよそ以上のようなことを予定している。

さて、小松市全域の方言調査を開始するにあたって最初の調査地域に選定したのは、小松市内で最も古態性をよく残していると予想された大杉谷川流域である。この地域は下の「調査地域図」の線で囲んだ範囲で、小松市内では東に隣接する尾小屋を中心とする郷谷川流域、丸山町・花立町・新保町(旧新丸村）のある大日川流域と並ぶ山間の地域である。大杉谷川流域でも特に上流部の大杉町(今回の話者の出身集落で言うと大杉本町・大杉中町・下大杉町)は、その歴史的・地理的条件からも方言的に古態性をよく残していると予想された。今回の調査の第一の目的が伝統的方言の記録・保存であるからには、まず市内でも方言の古い状態を残していると予想される地域から始めるべきと考えたわけである。

ところで、小松市内の方言に関しては、従来『小松市史』にも記述がなく、方言に関する記述としは、わずかに町村史誌類に語彙（俚言)を中心に若干の記載がある程度である。学術的な価値を持つ先行研究も小松市の方言を中心としたものはきわめて数が少ない。なお、今回の方言基礎語彙調査では、あらかじめ出現語形の見当をつけるために次の21の町村史誌を参考にした。

『石川県能美郡誌』『符津町史』『蛭川町史』『日末町史』『(波佐美町）町のあゆみ』『波佐谷町史』『長谷の歴史』『奈多谷風土記』『中海町史』『園町の歴史』『高堂町史』『月津村史』『新丸村の歴史』『下粟津町誌』『串町史』『草野町史』『木場町史』『軽海町史』『打越町史』『蓮代寺町誌』『矢田町の歴史』　以上

調査地域図



今回の大杉谷川流域調査では、まず大杉町で方言基礎語彙をはじめとするいくつかの体系的調査と自然談話の録音を行い、さらに大杉町の3集落を含めた8集落(大杉本町、大杉中町、下大杉町、赤瀬町、上り江町、瀬領町、波佐谷町、長谷町）について言語地理学的調査を実施した。

話者の条件としては、70歳以上で現在住んでいる集落の生まれ育ち、いわゆる生え抜きで、外住歴があまり長くない（5年以内）ことを原則とした。以下に、今回の調査にご協力いただいた話者の方々のお名前(敬称略)、性、生年、地点(在住集落）を記す。長時間にわたり調査に御協力下さった話者の方々、ならびに話者の方々の紹介等でお世話になった地元関係各位、さらにこの調査を裏方として支えて下さった小松市立博物館方言調査委員会の委員諸氏に心より感謝申し上げる。

なお、調査は、筆者が金沢大学教育学部で担当する「国語学実習・方言論実習」の一環として1996(平成8)年10月1日～3日に実施した。調査担当者は筆者のほか、教育学部3年生の田中剛、谷沢香織、野村真一、古野愛子、同学部4年生の寺澤奈芳美、三谷真須美、大学院教育学研究科1年生の阿部絵里香、武長哲也の計9名である。8名の学生諸君には、本稿執筆にあたっても、談話資料の文字化、基礎語彙資料の整理等で多くの協力を得た。記して感謝する。

＜氏　名＞	＜性＞	＜生年＞	＜地点＞	＜氏　名＞	＜性＞	＜生年＞	＜地点＞
長渕　つる	女	明治 42	大杉本町	吉田嘉右ヱ門	男	大正 10	上り江町
東　菊代	女	大正 7	大杉本町	高山　幸雄	男	大正 12	上り江町
大西　久良	男	大正 13	大杉本町	林　緑	女	大正 12	上り江町
能登　君子	女	明治 44	大杉中町	山本　輝子	女	大正 14	上り江町
杉本　甚七	男	大正 7	大杉中町	池田喜代司	男	大正 9	瀬領町
杉本　たか	女	大正 11	大杉中町	西村　信義	男	大正 9	瀬領町
大蔵　蔵吉	男	明治 41	下大杉町	西田　歌子	女	大正 10	瀬領町
中出　寛	男	大正 15	下大杉町	土田　清子	女	大正 14	瀬領町
吉田　元次	男	大正 4	下大杉町	城下　栄助	男	大正 5	波佐谷町
道端　政己	男	大正 6	下大杉町	神谷　孫二	男	大正 7	波佐谷町
丸山　亨	男	大正 14	下大杉町	山本富美子	女	大正 8	波佐谷町
				滝口た津子	女	大正 14	波佐谷町
松儀　貞子	女	大正 2	赤瀬町	谷保　豊磨	男	大正 11	長谷町
森　博人	男	大正 10	赤瀬町	田村　艶子	女	大正 11	長谷町
森　尚	男	大正 12	赤瀬町	堀　寛志	男	大正 13	長谷町
森　幸子	女	大正 15	赤瀬町	上出　貞子	女	昭和 2	長谷町

2．大杉町方言の概要

ここではまず小松市大杉町方言の音韻(音声)・アクセントおよび文法・表現法の概略について報告する。本稿で十分記述できなかった点については、 市内全域の報告が終わった時点でまとめる予定の最終報告書で、市内他地域とも比較しつつ 改めて報告することにしたい。

2.1 音韻

2.1.1 音韻体系

大杉町方言の調査で得られた資料をもとに、当該方言の音韻体系(モーラ体系)を示すと表１のようである。

以下では、このモーラ表をもとに、 共通語の音声と比較しつつ、大杉町方言の音声的特徴を略述する。表記にあたっては、必要に応じて音韻記号 (/　/)、音声記号([　])、表音的片仮名表記を用いる。

2.1.2 母音

(1)基本母音

母音のうち/o//a//e/については音声的に共通語のそれとそれほどの違いは観察されないが、強いて言えば/o/の開口度は共通語のそれよりやや狭い傾向が見られる。 /u/についても、西日本の方言、特に四国、九州、沖縄等で聞かれるような円唇性の強い[u]に対し、共通語と同じような非円唇の[ɯ]と観察される。一方、/i/については共通語の[i]よりも口の開きが大きく、共通語の[i]と[e]の中間的な[i̞]とも表記されるような音声である。この特徴は、当該方言に限らず北陸方言の広い範囲に

表1　大杉町方言のモーラ表（老年層）

／	’u	’o	’a	’e	’i	’ju	’jo	’ja	’wa	／
／	hu	ho	ha	he	hi	hju	hjo	hja	—	／
／	ku	ko	ka	ke	ki	kju	kjo	kja	kwa	／
／	gu	go	ga	ge	gi	gju	gjo	gja	gwa	／
／	ŋu	ŋo	ŋa	ŋe	ŋi	ŋju	ŋjo	ŋja	ŋwa	／
／	—	to	ta	ye	—	—	—	—	—	／
／	—	do	da	de	—	—	—	—	—	／
／	cu	co	ca	—	ci	cju	cjo	cja	—	／
／	su	so	sa	se	si	sju	sjo	sja	—	／
／	zu	zo	za	ze	zi	zju	zjo	zja	—	／
／	nu	no	na	ne	no	nju	njo	nja	—	／
／	ru	ro	ra	re	ro	rju	rjo	rja	—	／
／	bu	bo	ba	be	bo	bju	bjo	bja	—	／
／	pu	po	pa	pe	po	pju	pjo	pja	—	／
／	mu	mo	ma	me	mo	—	mjo	(mja)	—	／
／	N	Q	E	／						／

共通する特徴でもあり、聴覚的にも北陸方言色を特徴づける音声の一つと言ってよいだろう。これらの特徴と関連して、母音（子音に後接する場合を含め）の交代(音訛)現象が前舌母音の/ｉ/と/ｅ/、後舌母音の/u/と/o/、さらには狭母音の/ｉ/と/u/の間で語的に見られる。

・/ｉ/と/ｅ/　ヘリ(蛭)、エモンコ(芋の子＝里芋)、イビス（えびす＝寒天を原料にしたゼリー状の食べ物)、ケナクﾟサイ(きな臭い)

・/u/と/o/　ホトコロ（懐)

・/ｉ/と/u/　キリモン(着る物<着物>)、ヘブ（蛇)

（２）連母音

形容詞の語末の連母音－アイ［－ai](「赤い」などの)が融合・長音化して－エー［-e:]となり、カレー（辛い)、ニケﾟー(苦い)、アメー（甘い)のように発音されることが多い。他にも、やはり形容詞語末の－オイ［oi］が融合・長音化してクデー(くどい<塩味が濃い>)、ヒデー（ひどい)となることもある。また、同じ形容詞の語末で－ウイ［－ui］がワリー（悪い)のようになる例も見られる。

2.1.3　子音

共通語のそれと比較しつつ特徴的な子音について触れておく。

ハ行音は共通語と同じように/ho//ha//he/が［h]、/hu/が［Φ]、/hi/が［ç]で実現する。

カ行音についても共通語とほぼ同じであるが、歴史的仮名遣いで「くゎ」「ぐゎ」に相当する合拗音が一部の語で残っていて[kwa］［gwa］と発音されることがある。例えば、クヮシ(菓子)、クヮンリ(管理)、イックヮイ(１回)、グヮイジン(外人)などである。ただし、語中・語尾での［ŋwa]は稀にしか聞かれないようである。また、合拗音とは無関係なタックヮンのような例も聞かれた。

ガ行音は語頭で［g]、語中・語尾で[ŋ]となる。

タ行では、共通語と同じ/cu//to//ta//te//ci/のほか/co/ [tso]、/ca/ [tsa]がゴッツォー(御馳走)、オッツァー(父親の称)に聞かれた。

サ行、ザ行音については、/su//so//sa/については共通語とほぼ同じ。/si//zi/も、それぞれ共通語と同様に[ʃi] [dʒi]である。一方、/se//ze/は [ʃe] [dʒe]であり、シェンシェー (先生)、シェーネンノイエ(青年の家)、シェンター (<生活改善>センター)、ミシェモン(見せ物)、ユキカ゜ッシェン(雪合戦)、キシェル(煙管)、トーシェンボ(通せんぼ)、カシェク゜(稼ぐ)、シェンダク(洗濯)、ジェーキン(税金)、ジェン(お金<銭>)、ジェータク(贅沢)、アカジェダム(赤瀬ダム)など多くの例が確認できる。この他、サ行音に関しては、コソアドのソ系の語などで「ホヤケド(そうだけれど)」「ホーデネ(それでね)」「ホシテ・ホイテ(そして)」のように/s/が/h/になる現象がみられる。またザ行関係では語中・語尾でジが無声化してシに発音される例が、オンナシ(同じ)、ミシカイ(短い)などで確認できる。いずれも当該方言に限らず北陸方言に一般的な現象である。

そのほか、ナ行音・ラ行音・バ行音については共通語とほとんど同じである。

また、拗音の拍も共通語とほぼ同じであるが、/mja/の拍については今回の資料からは「ウミャーコト イッタ」(巧いことといった)でのみ確認できた。

2.1.4 その他

(1) 促音化

金沢方言をはじめとする加賀地方の多くの方言では、語中で無声子音や[r]に狭母音([i] [ɯ])の続く拍が母音の脱落・弱化をともなって促音化する現象が語的に盛んにみられる。当該方言も例外ではなく以下の様な多くの例が確認できた。

オッキャマ [okkjama] [okɯjama](奥山)の[k]の後の狭母音[ɯ]が脱落し促音化したもの。

カッリャスイ [karrjasɯi] [karijasui] (かりやすい<簡単だ>)からの変化。

カッタ [katta] [karɯta] (かるた<面子>) からの変化。

キッバ [kibba] 「まな板(俎)」の意のキリバン(切り板)[kiribaN]の語末のンが落ちた [kiriba] からの変化。

以上のほかにも、アソッバ (遊び場)、アッラ(油)、カンヌッサン(神主さん)、ヒャッショー(百姓)、イッコ(煎り粉)、ツッケ(机)、ソッデ(それで)、オイデッサケ(オイデルサケ=いらっしゃるから) など多くの促音化の例が見られる。

また、上記以外にも語的に促音が添加される場合も少なくない。具体例を挙げると、タックヮン[takkwaN] (漬け物の)沢庵、フッキン[ΦɯkkiN](布巾)、シッチャ(質屋)、ワッリャイ(割合)などである。

(2) 撥音化

語中に鼻音の [n] [m] [ŋ]を含んだ拍が母音を落として撥音化する現象が、オンマイ(お見舞)、マンサ(馬草・秣)、ムンカ゜ラ(麦藁)、タネモン(種籾)、キモン(着物)のような例で聞かれる。また、それら以外にも語的にタンネル(尋ねる、訪ねる)、アンナイ(危ない)、ヒンマ(昼間)、キンノキ(桐の木)のような撥音化や、カンジャ(鍛冶屋)のような撥音の添加も見られる。

(3) 長音化

当該方言では2拍名詞の一部の語に1拍目の母音が長呼され、ダーシ(出汁(だし))、クーキ(茎漬け)、カ

ービ(黴)、フーキ(蕗)、ユーリ(百合)、カーキ(柿)のように発音されることがある。これらの語に見える共通性はいずれも語末の拍が狭母音を含むこと、アクセントが頭高(●○○)になることである。この現象については、岩井隆盛(1969)などで、南加賀地方に広く行われ、2拍名詞の第2・3類に起こるとされているものにあたる。

2.2 アクセント

当初は、今年度の調査で大杉町方言のアクセント体系(名詞・動詞・形容詞等の)を記述するべく、多くの単語含んだ調査票を用意していたが、諸般の事情で当該地域のアクセント体系を記述するだけの十分な調査が終了していないので、本稿では大杉谷川流域の言語地理学的調査の調査票に加えたアクセント調査語彙(2拍名詞38語、3拍名詞11語、2拍動詞20語、3拍動詞13語、2拍形容詞1語、3拍形容詞6語、4拍形容詞2語)の範囲で、大杉中町方言のアクセント(話者:杉本たか氏　女　大正11年生まれ)を報告する。調査方法は読み上げ式調査である。

以下、アクセント記号は、●が語の中の高く発音される拍、○が語の中の低く発音される拍、▲が名詞に助詞が付いた時高く発音される助詞、△が低く発音される助詞を表わす。なお、◐は拍内下降(1つの拍の中で音の高さが高から低に移動する)を表わす。また、各語の後ろの(　)内のローマ数字は、歴史的に類別されたアクセントの語類を示す。さらに、ローマ数字で示した語類の後に小さく付したWとNは、Wが語末の母音が広母音(a・e・o)、Nが狭母音(i・ɯ)であることを表わしている。

2.2.1 名詞のアクセント

(1) 2拍名詞

2拍名詞のアクセントを名詞単独の場合と、助詞が付いた場合に分けて、当該方言で現れるアクセント型とその所属語を示す。

表2

Ⅳ	○●	○●、○●▲	酒、鼻、風(以上$Ⅳ_W$)肩、糸、空、稲(以上$Ⅳ_W$)
I_W	○●▲		箸、松、夜、海(以上$Ⅳ_N$)
I_N	●○	●○、●○△	腰、柿、鈴、水、鳥(以上I_N)歌、旗、川、胸(以上$Ⅱ_W$)
Ⅱ	●○△		橋、夏、肘、紙(以上$Ⅱ_N$)足、靴、犬、鍵、波(以上$Ⅲ_N$)
$Ⅲ_N$			秋(V_N)
$Ⅲ_W$	○◐	○◐、○●△	池、花、熊(以上$Ⅲ_W$)汗、雨、窓(以上V_W)
Ⅴ	○●△		猿、春(以上V_N)

これらの結果から、大杉中町方言の2拍名詞のアクセントは、類と語末母音の広狭との関係から表2のように整理することができる。つまり、当該方言のアクセントは、5つの類全てが類ごとにまとまって同じアクセント型を示すのではなく、I類・Ⅲ類では語末の母音の広狭で2つの型に分かれるのである。ただ、金沢方言などに見られる、語末拍の母音の広狭だけでなく語末拍の子音の有声・無声までがアクセント型に影響を及ぼすといった特徴はないと考えてよさそうだ。もっとも、V類の多くが○◐、○●△のアクセントとなる中で「秋」のみ頭高のアクセントとなっているのは、今回のV類の調査語のうちで「秋」だけが語末の音声環境が無声子音+狭母音(i)の拍であることと関係があるかも

しれない。今後、さらに調査語を増やすなどして確認する必要がある。

（2） 3拍名詞

3拍名詞も単独の場合と助詞付きの場合に分けて調査をしたが、結果からそのアクセント型と所属語を示す。

○●●、○●●▲　着物（I）、桜（II）、朝日（V）、兎（VI）、背中（VI）、苺、

○●○、○●○△　男（IV）、鏡（IV）

●○○、●○○△　女（IV）、命（V）、娘

2.2.2　動詞のアクセント

(1) 2拍動詞

2拍動詞は、一部の動詞について言い切りの形と過去形のアクセント、その他については言い切り形あるいは過去形のいずれかについてのみ調査した。

まず、前者の調査結果を示す。

○●、●○（●○○）　煮る・煮た、寝る・寝た、咲く・咲いた、飛ぶ・飛んだ（以上I）

○●、○●●　降る・降った、書く・書いた、飲む・飲んだ、蒔く・蒔いた（以上II）

この結果から、2拍動詞については、言い切りの形では全て2拍目が高くなるが、過去形ではI類の動詞が頭高のアクセント、II類の動詞が平板のアクセントになることがわかる。

なお、後者の語の調査結果をみると、言い切りの形では「オル(居る)」を除いてやはり全ての動詞(I類の生(な)る、鳴く、II類の出る、吹く、鳴く、振る、履(は)く、着る、有る)が○●というアクセントであった。また、過去形「来た」「出た」は頭高の●○であった。

（2） 3拍動詞

3拍動詞は全て言いきりの形で調査をしている。結果は語によって平板型(○●●)と中高型（○●○）の2つのタイプに分かれることがわかった。それぞれの型の所属語は以下のとおりである。

○●●　渡る、開ける、枯れる、鳴らす、割れる、昇る、

○●○　見える、切れる、歌う、吠える、伸びる、跳(は)ねる、食べる

2.2.3 形容詞のアクセント

（1） 2拍形容詞

今回の調査語の中では2拍形容詞はナイ(無い)のみである。アクセントは○●であった。

（2） 3拍形容詞

3拍形容詞の調査結果からは、類によって頭高の●○○と中高の○●○の2つのタイプに分れることがわかった。それぞれの所属語は以下のとおりである。

●○○　痛い、厚い（以上I類）

○●○　高い、長い、青い、暑い（以上II類）

（3） 4拍形容詞

4拍形容詞は2語のみであるのでその結果を示すだけにする。

○●●○　苦しい、危ない

2.3 文 法

ここでは、大杉町方言の基礎語彙調査資料およびその調査中の会話資料、さらには音声(文字化を含む)と

しての保存を目的に行なった大杉町方言話者４名による自然談話資料（後掲の「５.大杉町方言の自然談話」にその文字化の一部を載せた)等に現れた文法に関する事象を報告する。

２.３.１　動詞の種類と活用

まず最初に、大杉町方言の動詞の活用表を表３に示す。この活用表は今回の調査で確認できた範囲で作成したもので、今後さらに精密な調査によって補われる部分もあるに違いないが、その概略は示し得たはずである。

表３の接続形式に含まれる助詞・助動詞等の詳しい意味・用法については、後述の「２.３.３　助詞」「２.３.４　助動詞」を参照されたい。なお、この活用表はいわゆる学校文法的な仮名書きの活用表ではない。なぜなら、仮名書きでは、共通語も含めて日本語の動詞の活用の正しいありさま(特に活用語幹と活用語尾の区別)を表わし得ないためである。表３のような書き方によって、五段動詞が子音語幹で、後接形式によって活用語尾(活用形)がａ、ｉ、ｕ（ɯ)、ｅ、ｏと変化する動詞(強変化動詞)であること、一段動詞が母音語幹で、後接形式によって活用語尾がゼロの場合とru、rjaなどが付加する場合がある動詞(弱変化動詞)であること、サ変・カ変動詞はその両タイプの混合型であることが、あらためて確認できる。

表中、語幹の(　)の部分は、活用形により活用語尾の(　)内の形と交替することを表わしている。また、活用語尾の欄のφは語尾がなにも付かない(ゼロである)こと、斜線(／)はその部分に相当する形が存在しないこと、Ｎは撥音(ン)に、Ｑは促音(ッ)に、Ｅは長音になることを示している。なお、語幹の一部に見られる（'）はそれが子音相当部分であることを表わしている。

表３　小松市大杉町方言の動詞活用表(老年層)

動詞の種類	代表語例	活用形／語幹	第１形	第２形	第３形	第４形	第５形	第６形	第７形	第８形	第９形	第10形
五段動詞	書く	ka(k)	a	a	i	(i)	u	u	ja	e	e	o
	漕ぐ	ko(ŋ)	a	a	i	(i)	u	u	ja	e	e	o
	出す	da(s)	a	a	i	(i)	u	u	ja	e	e	o
	勝つ	ka(c)	(t)a	(t)a	i	(Q)	u	u	ja	(t)e	e	o
	取る	to(r)	a	a	i	(Q)	u	u·N	ja	e	e	o
	居る	o(r)	a	a	i	(Q)	u	u·N	ja	e	e	o
	買う	ko(')	(w)a	(w)a	i	(E)	(E)	(E)	ja	e	e	o
	死ぬ	si (ŋ)	a	a	i	(N)	u	u	ja	e	e	o
	飲む	no(m)	a	a	i	(N)	u	u	ja	e	e	o
	飛ぶ	to(b)	a	a	i	(N)	u	u	ja	e	e	o
一段動詞	見る	m(i)	φ	φ	φ	φ	ru	ru·N	rja	φ·E	φ	φ
	起きる	'ok(i)	φ	φ	φ	φ	ru	ru·N	rja	φ·E	φ	φ
	寝る	n(e)	φ	φ	φ	φ	ru	ru·N	rja	φ·E	φ	φ
	開ける	'ak(e)	φ	φ	φ	φ	ru	ru·N	rja	φ·E	φ	φ
サ変動詞	為る	s	a	e	i	i	uru·iru	uru·eN	urja	i·eE		i
カ変動詞	来る	k	o	o	i	i	uru	uru·oN	urja	oi	o	o
		後接形式	～(サ)ス ～(サ)シェル ～(ラ)レル ～(サ)ッシャル	～ン ～ナンダ ～ンナン	～タイ ～ダス ～ナカ゜ラ ～サエ ～マス	～タ(ダ) ～テ(デ) ～タリ(ダリ) ～テモ(デモ)	～φ ～時・人 ～ケド ～ヤロー ～サケ ～カ゜ナラ	～ナ	～ヨカッタ	～φ ～ヤ ～マ ～ヨ	～(レ)ル	～(ヨ)ー ～マイカ

語幹の(　　)内の部分は活用形の(　　)内と交替することを示す。φはゼロ記号、Nは撥音、Qは促音、Eは長音。

ではまず、五段活用動詞「書く」を例に、活用形ごとに後接形式との関係を略述する。

・第１形　書カス、カカシェル(書かせる＜使役＞)、書カレル(書かれる＜受身＞)、書カッシャル(お書きになる＜尊敬＞)など。なお、＜使役＞の（サ)ス・（サ)シェル、＜受身＞の（ラ)レル、＜尊敬＞の(サ)ッシャルの五段動詞以外への接続については、後述の「２.３.４　助動詞」を参照のこと。

・第２形　書カン(書かない＜否定＞)、書カナンダ(書かなかった＜否定過去＞)など。

・第３形　書キタイ(書きたい＜希望＞)、書キダス(書き始める)、書キナカ゜ラ(書きながら)、書キサエスリャー(書きさえすれば)、書キマス(書きます＜丁寧＞)など。

・第４形　書イタ（書いた＜過去・完了＞)、書イテ(書いて)、書イテモ(書いても)、書イタリ(書いたり)など。

・第５形　何も後接しない言い切り、書クヒト(書く人＜体言＞)、書クケド(書くけれど)、カクヤロー(書くだろう＜指定・断定＞)、書クサケ(書くから＜理由＞)、書クラシー(書くらしい＜推量・様態＞)、書クカ゜ナラ(書くのなら＜仮定＞)など。なお、共通語のハ行五段動詞にあたる「買う」の類は、言い切りの形や名詞に続く場合などに本来の「買う」の [-au] が [-o:]と長音化する。そのためにこの類の動詞の語幹末尾(子音相当部分に前接する) 母音が[o]となっている。

・第６形　書クナ（書くな＜禁止＞)。

・第７形　書キャヨカッタ(書けばよかった)

・第８形　書ケ(書け＜命令＞)のように何も後接しない命令形、書ケヤ(書けよ＜命令＞)、書ケマ(書けよ＜命令＞)など。

・第９形　書ケル(書ける＜可能＞)。なお、サ変「為る」の可能形はデキル(出来る)となるため、＜可能＞のレルは後接できない。

・第10形　書コー（書こう＜意志＞)、書コー（書きなさい＜命令＞）など。＜意志＞あるいは＜命令＞の（ヨ)ーは、一段・サ変・カ変の動詞にはヨーで後接する。

次に、「書く」以外の代表語例のいくつかの活用について、表の見方も含め若干説明しておく。

（１）「出ス」などのいわゆるサ行五段動詞の第４形には、動詞により出イタのようにイ音便化するものと、押シタのようにイ音便化しないものがある。今回の調査でイ音便化が確認できたものは「干す」「挿す・指す」「燃やす」「落とす」「隠す」「外す」「こぼす」「こわす」「離す」「消やす（消す）」「直す」「合わす」など。一方、イ音便化しないものには「押す」のほか「貸す」「足す」がある。

（２）「買う」などのいわゆるハ行五段動詞は、当該方言を含めた石川県方言の多くで、言い切り形のコー(買う)、モロー(貰う)、過去形のコータ(買った)、モロ(ー)タ(貰った)の影響で語幹末尾母音がａからｏに変化している。

（３）共通語ではナ行五段活用となる「死ぬ」は、当該方言では言い切りが「死ク゜」となり、「漕ク゜」と同じく語幹末子音は/g/となる。

以上の記述と活用表によって、代表語例以外の動詞の活用についてもほぼ類推・判断できると思われる。

２.３.２　形容詞（ナ形容詞を含む）

大杉町方言で使用されるさまざまな形容詞・ナ形容詞(＝形容動詞)については、後述の「３．大杉町方言の語彙」を参照されたい。

ここでは、形容詞・ナ形容詞それぞれの活用の面について略述する。

形容詞については、「タカイ(高い)」を例にとると、タカカッタ(高かった)、 タコナル(高くなる)、タコネー(高くない)、タコテ(高くて)、タカイ・タケー(高い)、タカイ・タケー　ヤマ(高い山)、タカイヤロ・タカイジャロ(高いだろう)、タカイサケ(高いから)、タカケリャ(高ければ)のように活用する。

一方、ナ形容詞については、「シズカヤ(静かだ)」を例にとると、シズカヤッタ(静かだった)、シズカンナル(静かになる)、シズカヤナイ(静ではない)、シズカヤ(静かだ)、シズカナ　ヒト(静かな人)、シズカヤロ(静かだろう)、シズカヤサケ・シズカナサケ(静かだから)、シズカヤッタラ(静かだったら)のように活用する。なお、当該方言ではナ形容詞の活用語尾ヤの部分はジャとなる(但し、シズカジャサケとはならない)こともある。

2.3.3 助詞

助詞については、共通語の助詞の意味・用法と対比させながら大杉町方言の助詞を略述する。紙数の関係から、ここでの具体的用例の提示は必要最小限の記述にとどめた。記述中、片仮名表記のものが大杉町の方言形である。

(1) 格助詞

方向を表わす「へ」には「エ」かあるいは省略。場所を表わす「へ」には「エ」か「ニ」。「ニ」は時に「フクイネ　チカイ(福井に近い)」 「クキ゜バコネ(釘箱に)」のように「ネ」に近く発音されることもある。目的や場所を表わす「に」は同じ「ニ」。この場合も時に「ネ」に近く発音される。比較の「より(それより あの方がいい)」は「ヨリ」「ヨリカ」となる。所有を表わす「の(私の本)」が「ワシカ゜ヤ(私のだ)」のように「カ゜」になるのは石川・富山両方言に共通する特徴である。目的の「を」も「オ」。これもしばしば省略される。ただし、「水が飲みたい」などと言う場合の「が」にあたるものは「カ゜」あるいは「ミミァ　トーイモンジャサカイ(耳が遠いものだから)」のようになることもある。「友達と遊ぶ」と言う場合の「と」も同じ「ト」。場所、手段・方法、原因・理由などを表わす「で」も同じ「デ」。主体を表わす「が(私が行く)」も「カ゜」となる。

(2) 係助詞

「は」にあたるものは、「ワレ　アシタモ　クルカ(お前は明日も来るか)」のように省略される場合もあるが、「ワ」も聞かれ、また多くの場合「ムカシャー(昔は)」「ケンリァ　ナカッタ (権利はなかった)」のような形で実現する。限定を表わす「しか」には「シカ」「ダケシカ」、やはり限定・強調を表わす「さえ」には「サエ」「ダケ」となる。

(3) 副助詞

提示的限定や強調を表わす「でも(お茶でも飲もう)」は「デモ」。やはり限定を表わす「ばかり」は「アメバッカリフットル(雨ばかり降っている)」のように「バッカリ」。程度を表わす「ほど」は同じ「ホド」。量や範囲を限定する「だけ(お前にだけ言う)」も「ダケ」である。限定を表わす「きり(あれっきり来ない)」も同じ。程度を表わす「ほど」は「ジュップンク゜ライ、ジュップンホド (十分ぐらい)」「タベルク゜ライワ、タベルダケワ(食べるぐらいは)」のようになる。例示の「なんか」は「カサラ　イラン(傘なんかいらない)」のような「ラ」の形。不確定を表わす「やら(誰やら来たようだ)」は同じ「ヤラ」、あるいは「カ」となる。

(4) 接続助詞

接続助詞の類は、後掲の「5.大杉町方言の自然談話」資料の中にも多くの方言形式が確認できる。

まず、理由の「から・ので」にあたるものには「カラ」のほか「ジャマンナルサケ(邪魔になるから」「オボエトランサカイ(覚えていないから)」のような「サケ」「サカイ」が使われている。どちらかと言えば「サケ」の方が多用されているようである。逆接の「けれど・のに」にあたるものには「ケド」「ケンド」がある。「シランケド(知らないけれど)」「オモトッタケンド(思っていたけれど)」のように使われる。逆接の意では「イクラ　ノンデモ(いくら飲んでも)」のようにも使う。「アシカ゜イトテ(足が痛くて)」の「テ」は共通語と同じ。

(5) 終助詞

終助詞については、その意味・用法を共通語のそれと対比して示すのが難しいものも多いので、大杉町方言で用いられる主要なものをその中心的な意味、用例とともに示す。

ノー(感動)　イー　テンキヤノー(いい天気だねえ)。

ナー(感動)　ゲンキァ　イーナー(元気がいいなあ)。上の「ノー」と同様の意味用法をもつが「ノー」よりも待遇的に低い。

ネー(詠嘆)　シェンナンシネー(しなくてはならないしねえ)、(人名)サンテュノァ゛ネー(～さんというのはねえ)。ここで興味深いのは、金沢市内などで北陸方言独特の揺れるようなイントネーション(間投イントネーション)に乗って比較的若い世代を中心に広がっている「～゛ネー」に似た後者のような言い方が、当該方言では老年層にも現れている点である。金沢方言で起こったと同じような音声現象が金沢よりも先行する形で当該方言では起こっていたのかもしれない。

ワ(詠嘆)　カンデ　アルケンワ(担いで歩けないよ)。

ワネー(詠嘆)　モチニクイワネー(持ちにくいよね)。

ワイネ(詠嘆)　アワイテ　アッタワイネ(合わせてあったよね)。

ヤー(詠嘆)　ドコ　イクンジャイヤー(どこ行くのかね)。

ザ(訴え)　モノオト　ヒトツ　シェンザ(物音一つしないよ)。この「ザ」の使い方は福井県の嶺北地方の方言に見られる用法と同じもので、石川県内でも福井県に接する南加賀地方の加賀市方言などにも聞かれる。形態的には、金沢方言を中心とした「ソノフク　カワイージー(その服かわいいね)」の「ジー」、富山方言「ギューニュー　キトッタカ゜イゼ(牛乳がきていたよ)」の「ゼ」との関連を思わせるが、意味用法的には若干の類似性はあるものの別系統の終助詞と考えるべきである。

ワンデ(丁寧)　ウラモ　タッシャデ　オルワンデ(私も元気でいますよ)。「ワンデ」は後に「4.大杉町方言の待遇表現」でも触れているように、丁寧語の「です・ます」にあたるような意味をもつが、語形変化がない点では終助詞(文末詞)と見るべきであろう。

ワ(断定)　ココニ　アルワ(ここにあるよ)。

ワレ(断定)　ココニ　アルワレ(ここにあるよ)。上の「ワ」より待遇的に低い。

カ゜(確認)　モー　ヨカローカ゜(もういいだろうが)。

マ(強意)　ハヨ　カケマ(早く書けよ)。オクナマ(置くなよ)。命令や禁止の形に付いて意味を強める。

ナ(念押しの疑問)　キテクレルヤローナ(来てくれるだろうね)。

カ(疑問)　アシタモ　キテクレルカ(明日も来てくれるか)。

コ(疑問)　アシタモ　キテクレルコ(明日も来てくれるか)。

カナー(疑問)　コッデ　ヨカッタカナー(これで良かったかなあ)。

ナ(禁止)　モー　ワッシェンナ(もう忘れるな)。

2.3.4 助動詞

助動詞については、それの接続する動詞の種類と活用形(表3参照)を含めて、主な用法ごとにその語形変化とあわせて示しておく。

(1) 使役(サ)ス・(サ)シェル

五段・サ変動詞の第1形にはス、一段・カ変動詞の第1形にはサスで接続する。五段動詞「書く」では、カカサン(書かせない)、カカシタ(書かせた)、カカス(書かせる<人>)、カカセリャ(書かせれば)、一段動詞「見る」では、ミサシェン(見させる)、ミサシタ(見させた)、ミサス(見させる<人>)、ミサシェリャ(見させれば)、カ変動詞「来る」では、コサシェン(来させない)、コサシタ・コサシェタ(来られた)、コサス・コサシェル(来させる<人>)、コサシェリャ(来させれば)のようになる。以上からもわかるとおり、一段・カ変動詞では、一部の活用形でサス以外にサシェルが接続することもある。

(2) 受身(ラ)レル

五段・サ変動詞の第1形にはレル、一段・カ変動詞の第1形にはラレルで接続する。五段動詞「書く」では、カカレン(書かれない)、カカレタ(書かれた)、カカレル(書かれる<人>)、カカレリャ(書かれれば)、一段動詞「見る」では、ミラレン(見られない)、ミラレタ(見られた)、ミラレル(見られる<人>)、ミラレリャ(見られれば)、カ変動詞「来る」では、コラレン(来られない)、コラレタ(来られた)、コラレル(来られる<人>)、コラレリャ(来られれば)のようになる。

(3) 尊敬(サ)ッシャル

五段・サ変動詞の第1形にはッシャル、一段・カ変動詞の第1形にはサッシャルで接続する。五段動詞「書く」では、カカッシャラン(お書きにならない)、カカッシャッタ(お書きになった)、カカッシャル(お書きになる<人>)、カカッシャッタラ(お書きになったら)、一段動詞「見る」では、ミサッシャラン(ご覧にならない)、ミサッシャッタ(ご覧になった)、ミサッシャル(ご覧になる<人>)、ミサッシャッタラ(ご覧になったら)のようになる。

(4) 可能(レ)ル

五段動詞の第9形にル、一段・カ変動詞の第9形にはレルで接続する。語幹の拍数の多い一部の一段動詞にはラレルが接続する場合もあるが、その多くはレルが接続する、俗に言うところの「ら抜き」が進行している。五段動詞「書く」では、カケン(書けない)、カケタ(書けた)、カケル(書ける<人>)、カケリャ(書ければ)、一段動詞「見る」では、ミレン(見られない)、ミレタ(見られた)、ミレル(見られる<人>)、ミレリャ(見られれば)、カ変動詞「来る」では、コレン(来られない)、コレタ(来られた)、コレル(来られる<人>)、コレリャ(来られれば)のようになる。但し、一段動詞でも「着る」などでは、打消形でキレン・キラレンの両形が使われている。

(5) その他

以上の助動詞のほか、当該方言では、動詞の第2形に接続する否定のン、ナンダ(書カン<書かない>、書カナンダ<書かなかった>)、義務のンナン(カカンナン<書かなければならない>)、第3形に接続する希望のタイ(カキタイ<書きたい>)、第4形に接続する過去のタ・ダ(カイタ<書いた>)、第5形に接続する推量のヤロー(撥音ンに後接する場合ニャローも)・ジャロー(カクヤロー・カクジャロー<書くだろう>、カクンニャロー<書くんだろう>)、伝聞推量・様態のラシー・ソーヤ(カクラシー・カクソーヤ<書くらしい>)、第10形に接続する意志の(ヨ)ー(カコー<書こう>)、勧誘のマイカ(カコマイカ<書こう>)などがある。また、名詞(ナ形容詞の活用語尾にも)に接続して指定・断定を表わすヤ(撥音ンに後接する場合ニャも)・ジャも多用される。

3．大杉町方言の語彙

今回の大杉町方言調査では、伝統的方言語彙の記述のための調査項目として、平山輝男他編『現代日本語方言大辞典(全9巻)』(明治書院　1992～1994)編纂のために用意された「方言基礎語彙調査票」に載る約2300項目を参考とした。調査項目は18分野に分けられ、その内訳は＜天地・気候＞166項目、＜動物＞164項目、＜植物＞173項目、＜人体＞208項目、＜衣＞146項目、＜食＞202項目、＜住居＞162項目、＜民俗＞120項目、＜遊戯＞64項目、＜教育＞75項目、＜人間関係＞97項目、＜社会・交通＞158項目、＜行動・感情＞125項目、＜時間・空間・数量＞297項目、＜職業＞69項目、＜農・林・漁業＞150項目、＜勤怠・難易・経済＞50項目、＜助詞・助動詞・その他＞180項目となっている。ただ、以上の約2300項目には関連項目も多く、また実際の調査にあたっては調査者が各自項目の補充を行っているので、実質的な調査項目数はおそらく3000を超えていると思われる。

本稿では紙数も限られていることから、今回の基礎語彙調査の結果のうち、それぞれの分野ごとに共通語形と異なるものを取り上げ(共通語と同形からの音訛形と考えられるものは原則として省略した)記述する。なお、ここでの語彙(その関連語彙(関連)やそれらの用例(例)など)の記述にあたっては表音的片仮名表記を用い、名詞以外の活用のある語については〔　〕に品詞名(略記)、動詞については活用の種類も載せた。品詞名は動詞を〔動〕、形容詞を〔形〕、形容動詞を〔ナ形〕、副詞を〔副〕、連体詞を〔連〕、助動詞を〔助動〕、助詞を〔助〕のように略記し、動詞の活用の種類は五段を〔五〕、上一段・下一段をそれぞれ〔上一〕〔下一〕、サ変を〔サ〕と略記した。その他、慣用句的な表現は〔慣〕と略記した。

3.1 ＜天地・気候＞に関する語彙

ヒーサマ　太陽。オヒーサン、オヒサンとも。例ヒーサマ　シズマッシャル（お日さまがお沈みになる)。オヒサン　エカッシャッタ（お日さまがお沈みになった)。オヒーサン　デサッシャッタ（お日さまがお出になった)。関連ホッサマ　お星さま。例ホッサマ　ナカ゜レテゴザル（お星さまが流れていらっしゃる)。

オテラシ　太陽と月の光。例ヒーサマノ　オテラシ（お日さまの光)。ガンコナ　オテラシヤ（強い照りだ)。関連カンカンヒデリ　長期間雨の降らない日照り。

ゞマイヒ　良い天気。晴れ。「うまい日」の意。　エーテンキ、アオテンとも。例テンポナ　ゞマイヒヤッタンナ（ものすごく良い天気だったねえ)。

ムシヌクイ〔形〕　蒸し暑い。

アラシ　夏に吹く涼しい風。

ボンボカジェ　フェーン現象が起こった時などに吹く南風。例コンノ　ボンボカジェノ　フイトルノニ　ヒー　タイテ（この南風が吹いているのに火を焚いて)。

キツネノヨメドリ　青空の下で降る雨。日照り雨。関連シブシブアメ　しとしと降る雨。ヨダチ夕立。ガンコナアメ　ひどい雨。コヤシノアメ　田植え後の5月半ばの雨。例キョーノ　アメワ　エー　コヤシヤデ（今日の雨は良い肥料だよ)。

アマツブ　雨粒。関連コン　クリン　ツブァ　チーシャイ（この栗の粒は小さい)。関連ゞデル〔動・下一〕濡れる。

ドンドカミ　雷。関連ユキカ゜ミサマ　北陸地方で冬、雪の降る頃によく鳴る雷。

ベタユキ　水気の多い雪。アマケノユキ（雨気の雪）とも。関連ウツル〔動・五〕雪に足が深くもぐる。

ソラノビ　晴天の寒い朝、雪が固く凍った上を歩いて遊ぶこと。普段歩けない田んぼの上などを自由に歩けるので、子どもの冬の楽しい遊びの一つだった。

タルキ　つらら(氷柱)。古語「たるひ(垂氷)」に由来する語。例デケー　タルキカ゜　サカ゜ットル(大きい氷柱が下がっている)。

シミル〔動・五〕　手拭い、雑巾などが凍る。水が凍る場合はコールと言う。

カンジル〔動・上一〕寒さのために凍(こご)える。関連サブイ〔形〕寒い。サブカ゜リ　寒がりの人。チッタイ〔形〕冷たい。チッテー〔形〕とも。例ガンコニ　チッテー　ミズ(ものすごく冷たい水)。

アワ　表層なだれ。例アワ　デタ(表層なだれが起きた)。

イキリ　湯気。例イキリ　アカ゜ットル(湯気がたっている)。関連ヌクトメル〔動・下一〕　温める。それからの変化でヌットメル〔動・下一〕とも。

ユー　用水取入れのため水をせき止める所。せき(堰)。

テンジョー　山と山の間の平たい所。

ジシンカ゜イク〔慣〕　地震が起きる。

グリイシ　石垣の隙間に詰める石。

スマ　隅。

アワシャ　物と物の隙間。スキマとも。関連スキマカジェァ　サムテー(隙間風が寒くて)。

マンポ　トンネル。

アッラ　油。石油類の総称。アブラの音声変化形。大杉中町ではアッバとも。アブラとも。

3.2 ＜動物＞に関する語彙

トバ　いたち(鼬)のこと。関連テントバ　むささび(天を飛ぶ鼬の意)のことか。

ハチ　たぬき(狸)。タヌキとも。

シクムジナ　あなぐま(穴熊)のことか。

ムッグォ　もぐら(土竜)。

イシタタキ　せきれい(鶺鴒)。

フクドリ　ふくろう(梟)。

ギャル　蛙の総称。

トキャク　とかげ(蜥蜴)。

ヘブ　蛇の総称。ヘビとも。関連ヘブノキン　蛇の抜け殻。「蛇の衣(きぬ)」の意。サラマク〔動・五〕蛇がとぐろを巻く。サランナットルとも。

ジョジョ　どじょう(泥鰌)。

ガニ　かに(蟹)。

ジナ　かわにな(川蜷)。たにし(田螺)を細くしたような形の巻き貝で蛍の幼虫の餌になる。

ブト　ぶよ(蚋)。ブトーとも。蚊よりも小さく、日中の野良仕事のときなどに飛んできて血を吸う虫。昔はこの虫が近づかないように、布を巻いて火をつけたもの(かんこ)を腰につけたりした。

トットラムシ　蟻地獄のこと。トラムシとも。

ゴクラクチョー　あげは蝶。

ンマトンボ　とんぼ(蜻蛉)の大型のもの。鬼やんまのことか。

ハイボンボ　蝿。

バチ　蜂の総称

キボ　くも(蜘蛛)。例キボァ　イト　ハル(蜘蛛が糸をはる)

マメクジリ　なめくじ(蛞蝓)。マメクジとも。

ヘリ　ひる(蛭)。

ムカジョ　むかで(百足)。

ボー〔動・五〕追う。追いかける。

チャマエル〔動・下一〕　捕まえる。

3.3 ＜植物＞に関する語彙

ボッバー　かぼちゃ(南瓜)。ボッバ、カボチャとも。ボッバー、ボッバはともにポルトガル語abóboraに由来し、同系の語は北陸では石川県内から富山県西部にかけて広く分布している。

ゴンボ　ごぼう(午旁)。

エモ　芋の総称。当該方言では普通エモというと「さつまいも」をさすらしい。

カッツケイモ　じゃがいも(馬鈴薯)。バレーショとも。

エモンコ　里芋。関連ガシラ　里芋の株(親芋)のこと。カシラとも。

チソ　しそ(紫蘇)。

ジェンマイ　ぜんまい。ジェンメーとも。関連ワタボーシ　若いぜんまいについている綿状のもの。

アジェマメ　大豆。田んぼの畦に植えることから。ミソマメ(味噌の材料にすることから)とも。稀にキナコマメ(きな粉の材料になることから)とも。

ナンバ　唐辛子。ピーマン。普通緑色の物をナンバと言い、赤くなったものはアカナンバと言う。

ナンバキビ　とうもろこし(玉蜀黍)。「南蛮きび」の意。トーキビ(「唐きび」の意)とも。

ナスビ　なす(茄子)。

ネブカ　ねぎ(葱)。

ヘー　ひえ(稗)。

コージャ　麦にできる黒穂。

フーキ　ふき(蕗)。関連コブキ　野ぶき。

ジネンジョ　野生の山芋(自然薯)。畑で作ったものはナカ゛イモと言う。関連ゴンゴ　野生の山芋の蔓につく実(むかご)。

ソコマメ　落花生。ナンキンマメとも。

アジェサイ　あじさい(紫陽花)。関連ナナバケ　春から秋までずっと咲いているような紫陽花。

スモートリバナ　すみれ(菫)。子どもがこの花の首を引っ掛けて引き合いをし、どちらの花が残るか競い合うことから。スミレとも。

アシャシャキ゛　はこべ(繁縷)。

コヤノヒコ　露草。コヤは「こうや(紺屋)」の意。花の紫色からの連想。

タニタニ　金沢でいうカタハのことか。山あいの谷川の脇などに生える。

フッベ　瓢箪(ひょうたん)を乾燥させたもの。

ミズク゛サ　ほうせんか(鳳仙花)。

カーキ　柿。関連ツルシカ゛キ　干柿。

グンド　山ぶどう。

キンノキ　桐の木。

ツマメ　桑の実。クマメとも。

スンバ　杉の葉。乾燥したものを焚き付けに使った。関連コッサ　松の落葉。

ハリ　植物のとげ。トケ゜とも。竹や木のささくれはハリとは言わずトケ゜と言う。

イロズク〔動・五〕　熟す。関連ヨーダ　栗の実が熟した時にはクリァ　ヨーダ(栗が熟した)のように言う。

ネンソナル〔動・五〕　腐敗して食べられない状態になる。関連ボケル〔動・下一〕木が枯れてぼろぼろになる。シナビル〔動・上一〕植物の水分が抜けて本来の大きさよりも小さくなる。キンノ　ミズイレタノニ　テーツコデ　ダチカンワ(きのう水を入れたのに<花などが>しおれて駄目だよ)

3.4 <人体>に関する語彙

コーベ　前頭部。

オドリ　ひよめき。赤ん坊の前頭と後頭の骨と骨の隙間で呼吸の度にぴくぴく動く所。

ズコ　つむじ（旋毛)。ズーリとも。他に大杉中町でズリ、大杉本町でズイとも。

パケ゜ル〔動・下一〕　頭が禿(はげ)る。

ミケン　ひたい（額)。

ヘンカ゜ラメ　斜視。

メブッテ　ものもらい（麦粒腫)。古い言い方。メブッテーとも。最近はメモライとも。

マブイ〔形〕　眩(まぶ)しい。

ゴットバナ　粘りのある鼻水。

カザカク゜〔動・五〕　臭いを嗅(か)ぐ。

スコカブリ　頬かぶり。スコタンカブリ、ホーカブリとも。

ワニク゜チ　口の大きいこと。関連オチョボク゜チ　口の小さなこと。

ツバキ　つば（唾液)。

ヘラ　舌。

ハキ゜シ　歯茎。

ゴタムク〔動・五〕　無駄口を言う。関連ダマリ　口数の少ないあまり喋(しゃべ)らない人。

ワナル〔動・五〕　大声で叫ぶ。

ノドチンコ　懸雍垂(けんようすい)。口蓋垂(こうがいすい)。口を開けると喉の奥に上から垂れ下がっているもの。

ソラデ　手の甲の部分。

カンチビ　小指の古い言い方。今はコユビと言うことが多い。

チャンベ　女陰。チャンベーとも。

チンボ　男性の陰茎。ダンベとも。男の子の場合はチンチとも。関連キンタマ　睾丸(こうがん)。

ベーベスル〔動・サ〕　性交する。

オンコ　大便。主に子どもが言う。大人はクソとも。関連ションベン　小便。

ヒチベタ　尻に近い部分の腿(もも)。

カンズキ　股(また)の総称。関連ウチカンズキ　内股。ソトカンズキ　がに股。

ヒザカブ　膝。膝頭。ヒザとも。

コブラ　ふくらはぎ。こむら(腓)。関連コブラマクリ　ふくらはぎの痙攣。

キビス　かかと（踵)。

ケツマズク〔動・五〕　つまずく(躓く)。

コチョバス〔動・五〕　くすぐる。関連コチョバシ〔形〕くすぐったい。

カイ〔形〕　痒(かゆ)い。カユイとも。

シクロ　打ち身などによる青痣(あざ)。

カタネ　外傷ができてそれが膿(う)んだもの。

カトンボ　痩せた人のこと。ガリンボとも。関連ブタコエ　よく太った人のこと。

タッシャヤ〔ナ形〕　健康だ。関連ヨワメソ　よく病気をする人。

コワイ〔形〕　肉体的に疲れた状態。

コエル〔動・下一〕　太る。フトルとも。

アクチ　あぐら(胡座)。アクチカク〔動・五〕あぐらをかく。

ウツバ　正座。ウツバカク〔動・五〕正座する。関連ヨコウツバ　主に女性がする横座り。ヨコネマリとも。

カタク〔動・五〕　片方の肩、あるいは両方の肩を使ってものを担ぐ。関連カズク〔動・五〕背中全体を使ってものを担ぐ。ニナウ〔動・五〕天秤棒を使ってものを担ぐ。

ヤイト　灸の古い言い方。最近はキューと言う。

シンバリ　霜焼け(凍傷)。

3.5 <衣>に関する語彙

キモン　着物(和服類)の総称。関連ナカキ　上着になる和服。アワシェ　裏地を付けた着物。ドンブク　綿の入っている袖なしの胴着。ちゃんちゃんこ。ハンチャ　普段着。綿の入っている袖ありの胴着。ウワッパリ　ひとえもので和服の上から羽織るもの。オビトリハダカ　紐は締めるが帯をしない着物の着方。マイカケヒモ　帯をしないで前掛けの紐だけで着物を着ること。

キルモン　衣服の総称。キリモンとも。

ウワッパリ　上着。関連ウワッパオリ　防寒着。普段着で改まったときには着ない。ジャンバ　ジャンパーのこと。

ヘージェーキ　普段着。ヘーゼーキとも。ウワッパオリ、ハンチャ、ドンブクなどの普段着の総称。

チョッチョキ　普段着よりも少し良い外出着。関連イッチョーラ　一番良い着物。

カンレーシャ　死んだ人に着せる白い着物。「寒冷紗(かんれいしゃ)」(目の粗い薄い綿織物)からか。

ネンネバ　寝巻の古い言い方。ネマキとも。関連ヨキ　布団に袖がついたような形のもの。ハンチャを大きくしたようなもの。ハオリバ　夜、子どもを背負ったときに羽織るもの。

ノラキ　畑仕事、山仕事をするときに着る仕事着。野良着。関連サックリ　ナカキの下を切って、自分で作った仕事着。

オロシ　お下がりの着物や洋服。関連キダウシ　着古してだめになった服。「着倒し」の意か。

アタラシモン　新品の衣服。

ハッカケ　腰から下の着物の裏地。

トーシノウラ　普段着の裏地。

ヒダリカケアワシ　着物を左前になるところを右前にして着る着方。

ホトコロ　ふところ(懐)。

ハダコ　肌襦袢。上着の下に着る腰までの下着。

エマキ　腰巻の古い言い方。オコシとも。

ハンチャ　はんてん(半纏)。

トンビ　男性が着る和服用の防寒着。袖がある。関連 マント　和服用の防寒着。男女の区別なし。袖がない。

シェンダク　洗濯。衣服はシェンダク、食器はアライモン、仏壇はミガキモンすると言う。

コワジェ　足袋(たび)のこはぜ。例コワジェオ　カケル(<足袋の>こはぜをかける)。

コンモリカ゜サ　こうもり傘。

ドンノー　藁で作ってある蓑。古い言い方。ドンノーの代わりにゴザも使った。

ハッセル〔動・下一〕　干せる。例シェンダクモノ　ハッシェタ(洗濯物が干せた)。関連ドボドボニ　ヌレル(ぐっしょり濡れる)。　ダバンコニ　ナル (水でびしょ濡れになる)。

ハクモン　履き物の総称。関連アシダ　下駄の歯が高くなっているもの。昔は普段着のときにも履いたが、今は改まったときにしか履かない。チカタビ　地下足袋。ハバキ　畑仕事や山仕事のときの履き物。カンズキ　かんじき。カタラチンバ　履き物の左右が揃っていない状態のこと。

ツッカケ　サンダルのようなものをさして言う。

タングツ　短い靴。夏によく履く。子ども用はゴム製のものが多かった。

ブクリ　普段に履く歯の短い下駄。関連 カンカラ　雨の日用の下駄。タカケ゜タのようには歯は長くない。カップリ　女の子が履く下駄。ぽっくりのこと。

ツマカ゜ケ　つまかわ(爪革)のこと。

ジョーリ　ぞうり(草履)。

ハナズル　ぞうりや下駄の鼻緒。例ハナズル　タテル(鼻緒をすげる)

スジ　釣り糸。関連 ダブル〔動・五〕より合わせた糸が揃わないこと。例コノ　イト　ダブッテ　ヌイニクイ(この糸は揃わなくて縫いにくい)。

ヒボ　紐(ひも)。関連 ホソクク゜リ　腰紐。シャデ　真田紐。ギャンナワ(稲を束にまとめるのに使う細い縄。ダルダル〔ナ形〕紐や綱が緩い状態。

ハタムスビ　小間結び。関連カンカラムスビ　同じところで二度結ぶ固結びのこと。チョームスビ蝶蝶結び。ヒットキムスビ　チョームスビの片方の羽のない結び方。ツノムスビ　ほどけないようにする男結び。

フクロベル〔動・下一〕　ほころびる。関連 フクロベ　ほころび。例フクロベ　ヌワナ(ほころびを縫わなくては)。

シカイシ　繕ったり直したりした衣類のこと。

ハリ　針。関連ムシ　時計の針。裁縫用の針はハリでムシとは言わない。

ムスバル〔動・五〕　(糸などが)もつれる。ムダケル〔動・下一〕とも。ムダケルよりもムスバルの方がもつれかたの程度がひどい。例イト　ムスバルト　ドンナラン(糸がもつれるとどうにもならない)。

シェー　背の高さ。身長。ナリとも。例シェー　タコナッタ(背が高くなった)。　ナリャー　デカナッタ(背が大きくなった)。

シェンダク　針仕事。裁縫。ハリシコ゜トとも。

マエダカ　男の子の髪型の一種。

カイショラシー〔形〕　身綺麗な。例アノ　ヒト　カイショラシー(あの人身綺麗だ)。関連キリョ

ーヨシ　美人。ベッピンとも。メンデ〔ナ形〕醜い。例メンデ　ヒトヤ(ぶさいくな人だ)。ヒンソナ〔ナ形〕みすぼらしい。例ヒンソナ　カッコヤ(みすぼらしい恰好だ)。ショマケ゜タ　小汚い。だらしない。

ニツク〔動・五〕　似合う。ニアウ〔動・五〕とも。例ヨー　ニツク(よく似合う)

ショマダレ　だらしないこと。関連ショマケ゜タ　だらしない。ダラシャナイとも。

ミーカマウ〔動・五〕　おしゃれをする。身綺麗にする。ミーカモーとも。「身(を)構う」から。

ベンコ〔ナ形〕　器用な。例ベンコナ　ヒトヤ　オシロイ　ツケトル(器用な人だ、お白粉をつけている)。

チボ　杖。ツイボー(チボはツイボの変化形か)。ツエとも。例チボ　ツイテ　イッテコイ(杖をついて行ってきなさい)。

ハヤリモン　流行のもの。関連ハヤル〔動・五〕流行する。

3.6 <食>に関する語彙

アサイ　朝食。アサーイとも。「朝飯(いい)」の意であろう。例アサーイ　タベル(朝御飯を食べる)。
関連ママ　食事。御飯。

ヒーリ　昼食。ヒンマ、ヒンママとも。ヒーリ、ヒンマはお昼の弁当の意味でも言う。

ヨーダイ　夕食。関連オシュッショー　晩酌をすること。

ナンカ　おやつ。夜のおやつの意で夜食のことも言う。

ママコ゜メ　普段の御飯用のうるち米。

ヤキメシ　にぎり飯。「焼き飯」の意。昔は丸く握った御飯を焼き金で焼いたものしかなかったらしい。

コワメシ　赤飯のこと。コワメシのコワは固いの意のコワイから。

チャーカケメシ　お茶づけ。チャズケとも。

ゴッチャカ゜ユ　雑炊のこと。野菜などなんでもごっちゃに入れることからこう言う。

イッコ　麦こがし。イリコ(煎り粉)からの変化形。エッコとも。関西地方で言うハッタイコのこと。

ダコ゜モン　米の粉。コメノコとも。

ナッパ　キャベツ、白菜、ホウレン草などの菜類の総称。ナとも。

クーキ　ナッパ類を漬けた漬け物。

ニシンボー　にしん(鰊)の糠漬け。関連イシンボ　魚のごり(鮴)のこと。

ハベン　板付きのかまぼこ(蒲鉾)。昔はお呼ばれしたときに食べた。

イビス　寒天を原料にしたゼリー状の食べ物の名。

オツケ　味噌汁などの汁物の総称。関連メソシリ　味噌汁。ミソシリとも。

ウモネ〔形〕　おいしくない。関連 シオアメー〔形〕塩分が少なく薄味の状態。シオアマイとも。クドイ〔形〕塩味が濃い。クデー、シオク゜ドイ、シオク゜デー、ショーユクドイ、ショッパイなどとも。

サル〔動・五〕　腐る。

タイハク　白砂糖。昔の言い方。

カイブシ　鰹節。

ボチ　餅の総称。モチ[motʃi]の[m]が[b]と交替した形。種類によりアワボチ(粟餅)、キビボチ(黍餅)、マメボチ(豆餅)、シロボチ(白餅)、ヨモキ゜ボチ(蓬餅)、カンナモチ(欠き餅＝鉋(かんな)で削ったような形だから)、コンボチ(米餅＝餅米にうるち米を混ぜてついた餅)などの名前がある。

クワシ　菓子。関連マンジ　饅頭。

ゴッツォー　御馳走。

イデル〔動・下一〕　茹でる。関連ヌクシル〔動詞・サ〕料理などを温める。イキリ　湯気。

ホチャ　包丁。関連キリバン　まな板。キッバとも。主に野菜を切るのに使う。ナマイタ　魚などの生ものを切るのに使うまな板。

ハヤス〔動・五〕　野菜などを細かく切る。「切る」は縁起が悪いので避けて「生やす」と言ったらしい。

カラツモン　瀬戸物の総称。シェトモンとも。北陸ではかつて九州の唐津地方産の瀬戸物が多く流通したためこの名がある。

ヒダルイ〔形〕　空腹の状態。ハラ　ヘッタ(腹が減った)とも。関連ハラ　フケタ(満腹になった)。ノドカ゜ヒカラブ(喉が乾く)。

ネブル〔動・五〕　なめる。

3.7 ＜住居＞に関する語彙

ウチ　家。関連ゲンカ　玄関。

ハク゜チ　家の軒先。関連ハク゜チカ゜ワラ　軒先に並べる瓦の種類。ユキドメカ゜ワラ　屋根の雪止めのついた瓦の種類。

オエ　ニワ(玄関の土間)から入ってすぐの囲炉裏のある居間。関連カンノマ　お寺のお坊さんが来たときに居てもらう部屋。「上の間」から。ブッダンノマ(仏壇のある間)の横にある部屋。

アマ　中二階の秋に藁仕事などをする部屋。

ホエダナ　物置のホエ(薪)を入れておく棚。

シェンチャコ゜ヤ　家の外にある便所小屋。シェンチャ(便所)は「せっちん(雪隠)」に由来する。

シェンスイ　家の周りで池があって木や花を植え灯籠を置いたりする所。「泉水」から。関連バンバ　家の前のコンクリートを打ってある庭の部分。

ナカ゜シ　台所。関連ナカ゜シジリ　台所からの排水路。

エンゾ　汚水が流れる溝。関連ドボス　汚水を溜めておく所。

ダンダ　昔、風呂のことを子どもに向かって言った言い方。ダンブリとも。関連ジコ゜クブロ　五衛門風呂。ブンカカ゜マ　「文化釜」の意。循環式の風呂。

エテ　日本手拭いの古い言い方。テフキとも。

ハッサ　柱。関連ダイコクバッサ　大黒柱。カドバッサ　角柱。

ムッソ　藁のむしろ(筵)。

カラカミ　ふすま(襖)。

ジョー　鍵。「錠」の意。カギ゜とも。

スー　すだれ(簾)。

ツッケ　机の昔の言い方。ツクエからの音声変化形。ツクエとも。

クラカケ　高さの高い木製の脚立。どの家にもある。関連ケタツ　高さの低い脚立。大杉にはあまりない。キャタツからの音声変化形。

マッガ　枕。関連フトキ゜布団の総称。

バイタ　囲炉裏などで焚く薪。バイダとも。関連 囲炉裏などで焚く薪のうち、大きく太いものをハルキ、細かいものをタクモンと言う。

ガンド　鋸の総称。ノコギリあるいは省略してノコとも。

ジロ　囲炉裏。関連 ヒヤマ　囲炉裏の上に吊ってある棚。「火天」の意。ものを乾燥したり、天井の煤よけに付ける。ムコザ　囲炉裏の四座の一つ。一般に玄関から見て一番奥の座。家の主人が座る。ヨコザ　囲炉裏の四座の一つ。大杉町の場合ムコザから見た両側の座。客が座る。シモザ　囲炉裏の四座の一つ。ムコザの向かいで玄関側の座。妻や子どもが座る。

センバ　囲炉裏や火鉢で炭や灰をすくうのに使う金属製道具。十能。関連スコッパ　スコップのこと。

サントク　囲炉裏や火鉢で釜ややかんなどを載せるための置く三本足の金属製の道具。

ハヤツケン　マッチ(燐寸)。「早点け木」の意。今はマッチと言う。

ケズミ　消し炭。関連ヒケシツボ　消し炭を作るための火消し壷。ヒノオキ　赤くおこった炭火。火の燠。

ケヤス〔動・五〕　消す。五段活用するためケヤサン(消さない)、ケヤイタ(消した)のようになる。ケス（消す）の形は使わなかったらしい。

ケナクサイ〔形〕　綿や髪の毛などが燃えたときに出る臭い。関連コケクサイ〔形〕焦げ臭い。シットクサイ〔形〕死んだ人を燃やすときに出る臭い。「死人臭い」から。

ナコナル〔動・五〕　体を長くして横になる。関連アオムケ　仰向き。ウツブケ　うつ伏せ。

ヒンニョマ　昼寝をする時間帯。関連 ヒンニョマシコト　昼寝をしないでする仕事。例ヒンニョマ　サッシャイ(昼寝しなさい)。

アサネコク〔動・五〕　朝寝坊をする。関連アサネコキ　朝寝坊ばかりする人。

ネコッゲニナル〔動・五〕　子どもが機嫌が悪くて寝なくなる。

ビブラ　竹製の熊手(落葉などをかき集める道具)。関連レーキ　鉄製の熊手。

ヤンチャニスル〔動・サ〕　散らかす。

ジブキ　雑巾。最近はゾーキンとも。

タチマエ　家を建てるときの棟上げ式。関連オアタマシ　新しい家に仏壇が入ったことを祝うこと。

ヤウツル　引っ越し。ヒッコシとも。

カケヤ　樫などのかたい木で作った柄の長い大型の槌。

3.8 ＜民俗＞に関する語彙

トシハジメ　正月(1月15日頃まで)のこと。昔は繭玉を飾ったりした。

オカカミ　鏡餅。

マメマキノヒ　2月3日の節分の日のこと。シェツブンとも。

ボンノツキ　8月のこと。

ムシオクリ　虫送りの行事のこと。車に太鼓をつけアサキの束に火をつけて行列を行った。

マツリズキ　10月のこと。

ススハキ　煤払い。

ボッツキ　餅つき。ボチツキとも。関連ボチ　餅。ノシボチ　四角く伸した餅。

アトマツリ　祭りの翌日のこと。ウラマツリとも。

ドボ　墓石の上部のこと。

3.9 ＜遊戯＞に関する語彙

アソッバ　遊び場。

チンククリ　鉄棒で１回転すること。

シンガイ　隠し芸のようなもの。当地方では「へそくり金」のことをシンカ゜イジェンと言うが、それと関連して「心外」に由来する語か。

ハシリキョーソー　かけっこ。徒競争。

チョコ゜　お雛様や人形をさして言う。チョーコ゜モンとも。ニンキ゜ョ(人形)、ヒナサマ（お雛様）のようにも言う。

カッタ　丸型のめんこ(面子)。「カルタ(骨牌)」の意味が変化したものに由来するか。

オチンコ　雪道に作った落とし穴。あるいはそれを作って遊ぶ遊びのこと。川北町などではウツッコと言う。

オイコミ　鬼ごっこのうち、手つなぎ鬼にあたる遊びの名。

ジャンケンポン　じゃん拳。関連 じゃん拳のグー・チョキ・パーにあたる言い方はヘラ・ハサミ・イシと言った。

サンノモンモ　肩車。大杉では他に、サンノブンブ(下大杉町)、サルブンブ(大杉中町)、サル　ボンボ(大杉本町)などの言い方もある。

ケンケン　片足跳び。

オジャミ　お手玉。オジャミの中には小豆を入れた。

ハジキイシ　おはじき。

モンド　あやとり。

ツリ　遊び仲間。ツレ(連れ)とも。関連 ドハスル〔動・サ〕仲間外れにする。

ヨサカイ　けんか。「いさかい(諍い)」からの変化形。関連 イタメル〔動・下一〕いじめる。

エサリ　威張っている人。

3.10 ＜教育＞に関する語彙

オッシェル　教える。

マヤツ〔動・五〕　褒(ほ)める。古い言い方。

スム〔動・五〕　終わる。例 ガッコァ　スンダ(学校＜の授業＞が終わった)。「学校を卒業した」の意では「ガッコー　オワッタ」と言う。

クサミチ　みちくさ(道草)。ヨリミチ、ミチクサとも。

シズォコネスル〔動・サ〕　失敗する。間違える。「し損いする」から。関連 チコ゜ー〔動・五〕違う。

シェキバン　昔学校でノート代りに使った石の板。関連 シェケツ　シェキバンに小さな字を書く時に使った筆記具。今の鉛筆にあたる。子どもが使った。高等小学校の頃から鉛筆を使うようになった。ゴフン　シェキバンに大きな字を書く時に使った筆記具。今で言うチョークのようなもの。先生も生徒も使った。

シラカミ　白い紙。昔は習字用の半紙のようなものをこう言った。関連 チョーメン　ノート。帳面。

ボカス　成績の良い子に対して成績の良くない子のことを言う蔑称。ボケスとも。

コーシャー　知恵。例 コーシャーカ゜アル(知恵がある)。

ワッシェモノ　忘れ物。

サンニョスル〔動・サ〕　数を数える。計算する。

ウモナイ〔形〕　下手。うまくない。例ジァ　ウモナイ(字は下手だ)。

デッチボ　弟子。「丁稚坊」の意か。

ゲージン　芸人。関連キョクニン　芸達者な人。

3.11　＜人間関係＞に関する語彙

アンニャ　青年男子の一般的称。

ネンネ　下大杉町では赤ん坊のこと。大杉本町では大人の女性をさしても使われると言う。例ネンネカ゜ネンネオ　ウンダ(女の娘が赤ちゃんを産んだ)。

メロンコ　女の子に対する蔑称。メロ(女郎)は女性に対する蔑称。関連ニャー　お嫁さんに対する称。アンニャマとも。ニャーニャー　嫁にいっていない若い娘に対する称。

ボー　男の子に対する称。20歳前後の男性までに言うことがある。関連ボー　自分の息子が小さい頃このように言うことも。ボーズとも。チョー　娘(自分の娘や他家の未婚の娘)をこのように言うことも。

ゲァー　私。自称代名詞。[gea]とも[gja:]とも聞こえる。女性が用いると言う。ゲーとも。従来、白山麓の白峰方言固有の自称代名詞とされてきたギラからの音声変化形ギャー(若年層男性が使用)に酷似する点が注目される。関連ゲノウチ　私の家。「ゲ」は自分を卑下した言い方とも。

ワシ　男性が使う自称代名詞。関連ワテ　女性がよく使う自称代名詞。ウラ　主に女性が使う自称代名詞。大杉谷川下流域では男女ともにウラを使うらしい。

ワレ　同等から目下の相手に使う対称代名詞。複数形はワッラ。最近はアンタ、アンタラ(複数)をよく使う。

マー　50～60歳代の良い家の男性の称。関連ジージ　一般家庭の70～80歳代の老年層男性の称。オジジ　良い家の老年層男性の称。

ヒネル〔動・下一〕ふける。例アノ　オンナワ　ダイブ　ヒネタナー(あの女は大分年をとったねえ)。関連マシェル〔動・下一〕年の割に大人びる。ヒネクラシ〔形〕大人びた様子。ヒネコヤ〔ナ形〕ベテランだ。熟達している。

オッツァー　一般家庭での父親に対する呼称＜直接呼びかけるときの称＞・名称＜他人に説明するときの称＞。オトトー　良い家での父親に対する称。トーとも。最近はトーチャンとも。

オッカー　一般家庭での母親に対する呼称・名称。オカカ(良い家での母親に対する称)、カーとも。最近はカーチャンとも。関連メロオヤ　女親。

オジジ　良い家での祖父に対する呼称・名称。ジーとも。関連ジー　曾祖父の称。

オババ　良い家での祖母に対する呼称・名称。バーとも。関連バー　曾祖母の称。

オッサマ　伯父・叔父に対する称。関連オバサ　伯母・叔母に対する称。

モライコ゜養子。

アンカ　長男あるいは兄に対する呼称・名称。アンサ、アンサン、アンマとも。最近はアニキとも。一人前になった青年に対して言う。関連アンチャン　兄に対する一般的呼称・名称。

チョー　長女。アネサとも。関連ニャー　姉に対する呼称・名称。ネーチャンとも。

オジ　長男以外の息子(弟)の名称。関連ニバンオジ　二番目の弟。オジボーとも。サンバンオジ　三番目の弟。チサボーとも。コッパオジ　末っ子、あるいは末っ子に近い下の息子の名称。

ヒコ　ひまご(曾孫)。関連マタコ゜やしゃご(玄孫)。

マタイトコ　またいとこ(又従兄弟・又従姉妹)。例マタイトコワ　マタトモ　イワン(またいとこはまた(会おう)とも言わない)。

アトゾイ　再婚相手。関連ママハハ　継母。ママコ　継母からみた子ども。

トーチャン　妻からみた夫の呼称・名称。

カーチャン　夫からみた妻の呼称・名称。関連ジャーマ　夫からみた妻の名称としてウラ(赤瀬ダムから下の地域)の人が使う。大杉では言わない。

ヨメサ　嫁に対する名称。ヨメとも。

ミョート　夫婦。関連ヒトリミ　独り者。独身。

オモヤ　本家。関連ショタイデ　分家。ブンケとも。イッケ　親類。イッケドーシ　親類同士の一族。

ネンネモリ　子守り。

ヤンチャボー　いたずらっ子。関連コワロ　活発すぎる男の子。

コワロマサリ　お転婆。「男まさり」の意。オトコメロ(「男女」の意)とも。

セブル〔動・五〕　ねだる。せびる。

ナキメソ　泣き虫。

ヨタカ　宵っぱり。夜遅くまで起きている人。

エチャケナ〔ナ形〕　かわいい。カワイーとも。

3.12　＜社会・交通＞に関する語彙

コンネ　他家を訪問したときの「こんにちは」にあたる玄関での挨拶ことば。関連オハヨーゴザル「おはよう」にあたる朝の挨拶ことば。古い言い方。ゴザルカ　他家を訪問したとき玄関で家人の所在を確かめる言い方。オルカとも。家に来た客を出迎えたときは、ヨー　ゴザッタ(よくいらっしゃった)、ヨー　キテガッシャッタ(よく来てくださった)のように言い、客を見送るときは、マタ　ゴザイノー(またいらっしゃい)、マタ　キテガッシャイ(また来てください)のように言う。

イマキタワ　家に帰ったときの挨拶ことば。「ただいま」にあたる。「今来たわ」の意。イマッタワとも。

ショッシャ　物を貰ったときのお礼のことば。ショーシャとも。キノドクナ、アリカ゜トとも。

オイ　返事の「はい」にあたる言い方。アイアイとも。関連ナーモ　返事の「いいえ」にあたる言い方。ナンモ、イヤイヤとも。

ヨル〔動・五〕　人が集まる。

ヒトマジェニスル〔動・サ〕ひとまとめにする。いっしょにする。

ベン　タレル〔慣〕おべっかを言う。

ズレル　ぐれる。非行化する。

ドハスル〔動・サ〕　村の中で付き合いを絶つ。仲間外れにする。ハネダシスル〔動・サ〕とも。

カンニンスル〔動・サ〕　許す。

アシメル〔動・下一〕　頼る。例イツマデモ　アシメトンナ(いつまでも頼っているな)。

ウソコク〔動・五〕　うそをつく。関連ウソコキ　うそをつく人。

ノーナル〔動・五〕　なくなる。ナイヨンアル〔動・五〕とも。

ウチノバン　留守番。「家の番」の意。

アケ゜マス〔動・五〕　人物を敬う。神仏を敬う場合はウヤマウ、ウヤモーと言う。関連人徳のある人のことを「ニンドクノ　アル　ヒト」と言う。

メトンシュル〔動・サ〕　人を軽べつする。見下げる。

メントナ〔ナ形〕　みっともない。主に子どもを叱るときに言う。例 ソンナ　メントナ　コト　シェンナ(そんなみっともないことをするな)。

ヨーナイ〔形〕　恥ずかしい。ヨーナイを「ありがとう」の意で使うこともあると言う。

ヨボル〔動・五〕　招く。呼ぶ。

モッタイナイ〔形〕　ありがたい。関連 キノドクナ　「すみません」「ありがとう」にあたるお礼のことば。詫びる場合は、ワルイコトシタナ、カンニンシテクレなどのように言う。

コワイ〔形〕　(肉体的な疲労で) 苦しい。関連 ヒドイ〔形〕(病気などで)苦しい。

テンポコク〔動・五〕　大げさな嘘をつく。ホラコク〔動・五〕とも。例 テンポコクナ(でかいことばかり言うな)。

ワヤク　人をおだてること。冗談。

メンデー〔形〕　器量が悪い。メンデ　コ(器量の悪い子)。関連 ハラ　ワルイ　腹黒い。

オチャベ　おしゃべりな人。チャベとも。関連 グットベ　何もしゃべらない人。ダンマリとも。

ハコ゜タエ　口答え。

ハコ゜ムク〔動・五〕　人に逆らう。暴力的な反抗も含む。ゴタムク〔動・五〕とも。関連 アテコスル〔動・サ〕皮肉を言う。意地悪を言う。

アッコー　悪口。「悪口」の音読みから。

コトツケ゜ル〔動・下一〕　言付ける。人に頼んで言い伝えてもらう。

コズカイ　子どもの使い。

カル〔動・五〕　借りる。カッタ(借りた)。

マドー〔動・五〕　元どおりに弁償する。

キバル〔動・五〕　配る。例 キバッテヤレ　分けて(配って)やれ。

オテマ　子どもへのお小遣いやほうびの品物。

チミカク〔動・五〕　つねる(抓る)。

カチケル〔動・下一〕　物に打ちつける。

ガンポスル〔動・サ〕　げんこつで殴る。関連 カチナク゜ル〔動・五〕強く殴る。

ザイコ゜ー　都会に対する田舎。関連 ザイシュ　家が5軒～10軒とかたまった範囲。村。集落。「在所」から。ブラクとも。

ヤマンモン　小松の人が、大杉のような山間地に住む人のことをさしてこう言う。「山の者」から。

グルリ　まわり。周囲。関連 ハナ　外れ。端(はし)。

ズリ　そり(橇)。

ユキアタリ　突き当たり。「行き当たり」から。

ツンダッテイク〔動・五〕　人といっしょに行く。「連れ立って行く」から。

ユトジ　温泉に湯治に行くこと。

カヤス〔動・五〕　返す。戻す。

リンキ　やきもち。例 リンキ　シンナ(やきもちを焼くな)。

3.13　＜行動・感情＞に関する語彙

シェク〔動・五〕　急ぐ。例 ハヨ　シェカシャナ　マニアワンカ゜イヤ(早く急がせないと間に合わないよ)。

イロカ゜ハゲル〔慣〕　色が落ちる。

アタル〔動・五〕　貰える。例メンキョカ゜アタッタ(免許が貰えた)。

エサル〔動・五〕　騒ぐ。怒って興奮する。もったいぶる、気取るの意で使われることも。例ナニ　エサットルンヤ　オトナシシェー(何を騒いでるんだ。大人しくしろ)。

ニンカ゜シー〔形〕　賑(にぎ)やかだ。例エライ　ニンカ゜シカッタナー(えらく賑やかだったねえ)。

チャーツク〔動・五〕　落着く。例ウマイコン　チャーツイタ(うまいこと落着いた)。

チャム〔動・五〕　掴(つか)む。関連チャカ゜ル〔動・五〕掴まる。例ソンキン　チャカ゜レ(その木に掴まれ)。チャマエル〔動・下一〕捕まえる。例サカナ　チャマエル(魚を捕まえる)。

ホー〔動・五〕　這(は)う。例コッチャマデ　ホーテコイ(こちらまで這ってこい)。デカェ　ヘビァホートル(大きい蛇が這っている)。

ヌズォク〔動・五〕　覗く。例チョット　ヌズォイテッタ(ちょっと覗いて行った)。

オク〔動・五〕　止める。例サケモ　タバコモ　オク(酒も煙草(たばこ)も止める)。

コーキ　気持ち。例チョード　コーキ　エーサケ(ちょうど気分がいいから)。

ガテン　納得。例ガテン　シェン(納得しない)。ガテン　デキン(納得できない)。

キーヤム〔動・五〕　心配する。例ナニ　キーヤンドルンジャ(何を心配しているんだ)。関連ムサイ〔形〕気掛かりな。心配な。かわいそうな。例シナイテモーテ　ムサイコッチャ(死なしてしまってかわいそうなことだ)。

アンナイ〔形〕　危ない。例ナーンチャ　アンナイ　アルッカタ　シトンナイ(何だ、あぶない歩き方しているなよ)。

アッタラナ〔ナ形〕　惜しい。例アッタラナ　コト　シタ(惜しいことした)。関連カナシム〔動・五〕悔やむ。例ナニ　サネ　カナシンドランカッテエエヤロ(何だ、そんなに悔やんでいなくてもいいだろう)。

エトッシャ〔ナ形〕　(悲しいできごとに対して)気の毒だ。かわいそうだ。「いとし＋や」の形で一語化したもの。活用はしない。関連エトシケ゜ニ　「ありがとう」にあたる感謝の意の挨拶ことば。

オーカタ〔副〕　多分。

シナシナ〔副〕　そろそろ。例シナシナ　デカケッリャ(そろそろ出かければ)。

シナーット〔副〕　ゆっくり。例シナーット　モノユー(ゆっくりものを言う)。関連ジックリ〔副〕例モー　チョット　ジックリ　シャッセ(もう少しゆっくりなさい)。ジックリサー　ゆっくりしている人。ナカ゜ッチリ　一度座ったらなかなか腰を上げない人。

ショーコタナシニ〔副〕　仕方なく。しぶしぶ。関連ショーコトァネー〔形〕仕方ない。

アク〔動・五〕　飽きる。例アイテシモタワ(飽きてしまったよ)。

イリイリスル〔動・サ〕　いらいらする。焦る。

ケナルイ〔形〕　羨ましい。

ショーワル　根性の曲がった人。心根の悪い人。「性悪」の意。ハラワル、ハラク゜ロとも。関連キノエーシト　気持ちの良い人。やや悪い意味で「お人好し」の意で使うことも。

キダカイ〔形〕　傲慢な。キカ゜タカイ〔慣〕とも。

オモッショナイ〔形〕　面白くない。つまらない。

ヤクチャモナイ〔形〕　どうしようもない。

ハカ゜イ〔形〕　悔しい。歯痒い。ハ゛カ゜イとも。

ヘシナイ〔形〕　待ち遠しい。例マットッタラ　ヘシナイ(待っていたら待ち遠しい)。

イジクラシー〔形〕　じゃまになって煩わしい。

サビシカ゜リ　寂しがりの意のほか、臆病者の意でも使う。

ヤンチャモン　乱暴者。関連ヤンチャナ〔ナ形〕乱暴な。例ガーンコ　ヤンチャナ　ヤツデ(とても乱暴な奴で)。

ヒネクラシー〔形〕　早熟なこと。ませていること。

コンジョヨシ　気が良すぎる人。お人好し。「根性良し」から。

ジョンナ〔ナ形〕　悪い意味で変わった。おかしな。関連ジョンナヒト　変り者。ジョンナコト　とんちんかんなこと。おかしなこと。例ジョンナコト　ユートンナマヤ(おかしなことを言っているなよ)。オモッシェ〔形〕滑稽で面白い。オモッセとも。

ガンコナ〔ナ形〕　「頑固な」の意のほかに「大きな」「ひどい」の意も。例ガンコナ　イシ(大きい石)。コトシャ　ガンコナ　ユキャ　フッテ(今年はひどい雪が降って)。関連ガンコ〔副〕とても。意味を強調してよく用いられる。例ガーンコ　ヤンチャナ　ヤツデ(とても乱暴な奴で)。

リキム〔動・五〕　一生懸命頑張る。例リキンデ　イッタケド　オイツケナンダ(頑張って行ったけれど追いつけなかった)。

ヨクナ〔ナ形〕　欲張りな。

ダチャカン　駄目な。「埒明かぬ」からの変化形。ダチカンとも。

ゲッサカ゜ッタコト　下品なこと。「下衆(げす)下がったこと」の意か。

アキショナ〔ナ形〕　飽きっぽい。関連マメンナイ〔形〕怠け者。「まめでない」から。ドーラクモンとも。マメナ〔ナ形〕働き者。

ショージキショッコナ〔ナ形〕　真っ正直な。真面目な。

テンポナ〔ナ形〕　ひどい。ひどく。例テンポナ　コンザツシトッタ(ひどく混雑していた)。関連テンポコキ　大ぼら吹き。

メルラシー〔形〕　珍しい。例アッラ　エッレ　メルラシー　ヨッタナ(あら、えらく珍しい、酔ったね)。

シッシャクデ　テオ　キル〔慣〕　思いがけないことが起きる。

ダラ　愚かなこと。馬鹿。ダラナ〔ナ形〕も。語源的にはタラズ(<頭が>足りない)→ダラズ→ダラと変化したと考えられている。例ダラナコト　ユートンナ(馬鹿なことを言っているなよ)。エッレ　ダラサワキ゜シトル(えらく馬鹿騒ぎをしている)。

イチカ゜イナ〔ナ形〕　気が短い。

ドクショナ〔ナ形〕　柄(がら)の悪い。例ドクショナコト　ユーナマイ(柄の悪いこと言うなよ)。

コーシャナ〔ナ形〕　利口な。人を褒(ほ)める場合に使う。関連リクツナ〔ナ形〕物分かりのよい。リクツナは人以外の物に対しても言う。例リクツナ　タテカタ(実に上手な建て方)。ハシカイ〔形〕ずる賢い。

エチャケ゜ナ〔ナ形〕　愛嬌がある。例ナーンチュ　エチャケ゜ナ　コヤ(なんて愛嬌のある子だ)。関連コズラニクイ〔形〕生意気な。

ダテコク〔動・五〕　身なりを良くする。関連ダテコキ　身なりを良くして気取って着飾る人。

ベンチャラコク〔動・五〕　良いことを言って相手の機嫌をとる。関連ベンチャラコキ　良いことばかり言って愛想が良すぎる人。

イサドイ〔形〕　元気が良い。

コスカン〔形〕　気にくわない。きらいだ。

ヘンバイ　不得手。不得意。苦手。

テンコ゜シャナ〔ナ形〕　まめな。無精でない。

シェーモム〔動・五〕　腹を立てる。関連シャモメル〔動・下一〕怒る。腹を立てる。

オモイデナ〔ナ形〕　楽しみな。例オモイデナホド　クリャ　トレタ(楽しいほど栗がとれた)。
関連ウルッシャ〔形〕嬉しい。

シッペコク〔動・五〕　思うようにならない。例シッペコイタ(思うようにいかなかった)。

カスオコス〔動・五〕　ふざける。おどける。

タッシャヤ〔ナ形〕　元気だ。例ホソイケンドモ　タッシャナモンジャナ(細いけれど元気なものだな)。関連ソッサイ　元気。「息災」から。例ソッサイニ　ナラッシャッタ(元気になられた)。

ダンナイ〔形〕　大丈夫だ。ジャマナイ〔形〕とも。

ヒデ〔形〕　つらい。例ヒデンコト　ナッタナー(つらいことになったね)。ヒドク　アタル(つらくあたる)。関連エレーメニ　オー「えらい目にあう」の意で、苦労すること。

ヨンナイコト　迷惑なこと。

ヨワル〔動・五〕　困る。

シャナイ〔形〕　仕方がない。

3.14　＜時間・空間・数量＞に関する語彙

アサキ゜リ　朝の6～7時頃の時間帯をさしてこう言う。以下に大杉町での1日の時間帯による呼び方を表で示す。

4時		6		8	10		12	14	16	18	20	22	24	2時
	ヨアケ		アサギリ		ヒルマエ	ヒラガリ	ヒンマ　ヒンニョマ	ヒリオリ	ヒルカラ	ヨサガタ	バン	ネシナ	ヨナカ	

ヒラカ゜リ　お昼の食事前(11時～12時頃)の時間帯。

ヒリオリ　昼ご飯のあとの時間。一休みしてまた労働を開始する時間。

ヒダナカ　夜に対する昼。ニッチュー、ヒノナカとも。

ヒンマ　正午頃の時間。ヒルマとも。関連ヒンニョマ　13時～14時頃の昼寝の時間帯。

ヨサカ゜タ　夕方の17時～18時半頃の時間帯。「夜さり方」から。ヨサリは夜の意。

イチニチハサミ　1日おき。

ツキジマイ　月末。

サカリ　最中(さいちゅう)。サナカとも。例アツイ　サカリ(暑い最中)。

ハナッパ　中心から離れた端の方。関連ハシッパ(板などの)切れ端。キレハシ、キレクズとも。

ワルドシ　廃れた世の中。悪いことの多い年。

ヨンベ　昨日の晩。ゆうべ。

オトツイ　一昨日。関連サキオトツイ(一昨昨日)、オトツイ、キノー(昨日)、キョー(今日)、

アシタ(明日)、アサッテ(明後日)、シャサッテ(明明後日) のように順番に言う。

ニワカニ〔副〕　急に。例ニワカニ　オイデタ(急にいらっしゃった)。ニワカニ　トンデデル(急に飛び出す)。

ジキ〔副〕　すぐ。例ジキ　ヘンジシテモラエンカ(すぐに返事をしてもらえないか)。

チョイチョイ〔副〕　時々。関連タマネ〔副〕たまに。

マニオー〔動・五〕　足りる。例イチマンエン　カシテクレレバ　マニオー(一万円貸してくれれば足りる)。

カカリ　ものごとのはじめ。例シコ゜トノ　カカリ(仕事のはじめ)。

ヨーケ〔副〕　たくさん。ヨケとも。関連デーコ〔副〕たくさん。例デーコ　モッテク(たくさん持っていく)。デッカイコト〔副〕たくさん。例デッカイコト　ウンダ(たくさん産んだ)。

チョッコリ〔副〕　少し。チョコントと言う人も。例チョッコリシカ　ナイ(少ししかない)。

チョッコ〔副〕　ちょっと。チョコとも。例モー　チョッコ　ヒマカ゜アレバ　デキタノニ(もうちょっと時間があればできたのに)。

イランコト　余計なこと。例イランコト　ユーナ(余計なことを言うな)。

タラン　足りない。不足。人の愚かなことをさして言う場合もある。例チョット　タランノデネーカ(ちょっと<頭が>足りないんじゃないのか)。

ドンダケ　いくつ。いくら。例ドンダケ　コータ(いくつ買った)。コレワ　ドンダケヤ(これはいくらだ)。ドンダケ　マットッテモ　コナンダ(いくら待っていても来なかった)。

イッカ　何日。例イッカ　タッタナ(何日経ったかな)。

ナンカ　七日。ナヌカ、ナノカとも。関連1週間、2週間、3週間、4週間をそれぞれヒトナンカ、フタナンカ、ミナンカ、ヨナンカのように数える。ショナンカ　初七日。

ヘン　回。イッペン(1回)、ニヘン(2回)、サンベン(3回)、シヘン(4回)のように数える。

ワ　束。把。稲などの束を数える数え方。関連タバ　束。稲の場合は12ワ(把)をひとまとめにして縄で縛ったものを～タバと数える。

ホッコリ〔副〕　すっかり。主に女性が使うことば。スッカリとも。例ホッコリ　ワシェトッタ(すっかり忘れていた)。

グルリ　周り。例イエノ　グルリ(家のまわり)。

カド　玄関の外、家の前の場所。例カドデ　アソブ(玄関の表で遊ぶ)。

トナリドナリ　2・3軒離れた家。

ヨテヤ　自分に向いている。得意だ。「得手」から。例アノ　シコ゜トワ　ヨテヤ(あの仕事は自分に向いている)。アノ　シコ゜トワ　ヨテネー(あの仕事は自分に向いていない)。

カタ　～の方(ほう)。例ミキ゜ノカタ(右の方)。

チエカ゜ツク〔慣〕　考えが浮かぶ。例ヨー　カンカ゜エタラ　チエカ゜ツイタ(よく考えたら良い考えが浮かんだ)。

ビチンコ　足をぴょんぴょんさせること。例ビチンコ　コイテ　ドロ　カケタ(ぴょんぴょん跳びはねて泥をかけた)。

マウ〔動・五〕　回る。モーとも。例ミズク゜ルマカ゜モートル(水車が回っている)。

ホール〔動・五〕　投げる。捨てる。例タマオ　ホーッタ(ボールをほおり投げた)。

ハヤリノコト　人並のこと。今風のこと。形式的なこと。

チーシェー〔形〕　小さい。チンチェー〔形〕、チンチャイ〔形〕とも。
ミシカイ〔形〕　短い。
ヒシ　斜め。例ヒシニ　ワタル(斜めに渡る)。関連カタカ゜ル〔動・五〕傾く。例エカ゜　カタカ゜ットル(絵が傾いている)。
マルノミ　全部飲むこと。グットノミとも。
ワンボ　輪。
シミル〔動・五〕　湿る。水分を含む。
フルシー〔形〕　古い。ク活用の「古い」をシク活用に類推して変化させたもの。
ガンコナ〔ナ形〕　きつい。例ガンコナ　コトオ　ユータ(きついことを言う)。ガンコナ　ヤツ(性格がきつい奴)。関連エライ〔形〕つらい。例シコ゜トカ゜　エラカッタ(仕事が辛かった)。
ヤラカイ〔形〕　柔らかい。
キツイ〔形〕　強い。
ネンコ゜ロナ〔ナ形〕　丁寧な。例ネンコ゜ロニ　シテモロテ(親切にしてもらって)。ネンコ゜ロナ　アイサツ(丁寧な挨拶)。
ヤンチャナ〔ナ形〕　乱暴な。ぞんざいな。関連ソソナ〔ナ形〕いい加減な。
エンコノワリー〔形〕　機嫌が悪い。例エンコノワリー　カオ(機嫌の悪い顔)。
アンネ〔形〕　危ない。アンネーとも。例アンネ　メニ　オータ(危ない目に会った)。
ションベン　コク〔慣〕　約束を破る。
ヌケル〔動・下一〕　山や崖が崩れる。
ヘク゜〔動・五〕　剥(む)く。例スキ゜ノ　カワ　ヘク゜(杉の木の皮を剥く)。
オンナシ　同じ。
ゲコ　スル〔慣〕　解散する。会を閉じる。
ヘラウ〔動・五〕　拾う。
カバイロ　だいだい(橙)色。
ウズム〔動・五〕　埋まる。例ウズンドル(埋まっている)。
シンナ　してはならない。するな。

3.15　＜職業＞に関する語彙に関する語彙

ゴエンサマ　お寺で一番位の高いお坊さん。住職。ゴエンジョサンとも。関連ワカサン　若い後継の住職。ゴボサン　ゴエンサマより位の低いお坊さん。ゴボーサマとも。オキョーサマアケ゜ル〔動・下一〕お経を読む。お経を上げる。ネハンニ　オツキニナッタ　お坊さんが亡くなったことをこのように言う。
マジナイシ　祈祷師。
ダンナサン　警察官のことをこう言う。
シッチャ　質屋。
リョーリヤ　飲食もできる料理屋。仕出し屋を兼ねた店のことも。シダッシャ(仕出し屋)、ノンミャ(飲み屋)とも。
アンマサ　あんま(按摩)。マッサージ師。アンマとも。
チューカイニン　周旋業。「仲介人」の意。

ドカタ　土木作業に携わる人。関連ニンブ　人夫。ニンソクとも。ニンブチン　日雇い人夫の賃金。

ゲッキュートリ　個人営業の人に対してサラリーマン一般(公務員等も含む)をこう言う。

テショク　手に職のある技術者。ショクニンとも。

カベヤ　左官屋。カベヤサン、サカンヤとも。

アキナイヤ　商人。ショーバイヤとも。関連アキナイ　商売。

オロシヤ　問屋。トイヤとも。

フルモンヤ　古物商。コットモンヤとも。

フリウリ　個人で行商をして歩く人。ギョーショーとも。

カンジャ　鍛治屋。関連エカケヤ　鋳掛屋。やかんや鍋の修繕をする人。

ヤサイモノヤ　八百屋。アオクサヤとも。

テッポーウチ　鉄砲を使って狩りをする人。

コビキ　木を切ることを職業にしている人。コビキヤサンとも。関連ガンド　大型ののこぎり(鋸)。ガンゾとも。小型ののこぎりはノコキ゜リと言う。

ギョーシ　漁師。

ヤキ゜ョー〔動・サ〕　よなべ仕事。ヨナベとも。

ハカイク〔動・五〕　はかどる(捗る)。物事が順調に進む。

トクイサン　得意客。オトクイサンとも。

3.16　＜農・林・漁業＞に関する語彙

ヒャッショー　百姓。農家。ヒャクショーとも。最近はノーカと言う。

サツキ　春の農繁期(五月)のこと。関連サツキヤスミ　田植えが終わったあとの休み。今はもうしない。トリイレドキ　秋の農繁期。イネドキとも。

ヌマダ　1年中水のある湿田。米の取れ高の違いで、よくとれる最上級の田をイワリ、次の等級の田をロワリと言った。関連フカダ　耕作に適さない深い田。ナワシロダ　苗代を作る田。ハタケダ　畑を田んぼに変えた田。カイデン　新しく開墾した田。

ドイ　高さの高い土手。関連アジェ　高さの低い畦(あぜ)。

シェメン　セメント。関連コンクリ　セメントに砂と水を混ぜて練り固めたもの。

タネモン　種籾。関連タネイケ　発芽させるために種籾を漬けた池。　メダシ　種籾を発芽させること。

ヌカ　籾殻。ヌガ、モミカ゜ラとも。

ヒャクショーシコ゜ト　野良仕事。関連タンボシコ゜ト　田んぼ仕事。ハタシコ゜ト　畑仕事。

イー　結。田植えや稲刈りなどの農繁期に、お金を出さずお互いに労働を交換し合うこと。「結(ゆい)」から。関連ヒョーチン　雇った人への賃金。ニンブチン(「人夫賃」の意)とも。

アラオコシ　春の田植え前、一番最初に田を荒く起こすこと。関連スキオコシ　馬に鋤を引かせて田を起こすこと。キザミ　荒起こしした田の土を細かくすること。アラコ゜ナシ　荒起こしした田に水を溜めて馬鍬でやわらかくすること。アラコ゜ネとも。

イブリ　Yの字型の棒に横長の細い板がついた農具。田植え前に水を入れた田の土をこれで平らにならす。

タンマヤ　田の耕作用の馬。タンボウマとも。関連ニク゜シ　馬に飲ませる米のとぎ汁。

ナウッソ　苗代(なわしろ)。

マザシ　間差し。田植えのあと、植えた苗と苗の間にさらに苗を植え足すこと。関連 ウシェウエ　田植えのあと、植えもらした所や苗が浮いた所に補植すること。

ワク　田の表面に筋をつけて苗を植える場所を決めるために田を転がす(ワクコロカ゜シする)六角の木枠。

スク゜ル〔動・五〕　菜っぱ類の苗床から不要なものを間引く。大根などがたくさん生えている場合に不要なものを間引くことはマビクと言う。

イナムジリ　刈り取った稲を束ねるとき、あとで稲束を立てやすいように1把の半分ずつを交差させて縛ること。

カリアケ゜　稲刈りが終わった祝い。餅を作ったりした。

ツボカリ　坪刈り。市役所・税務署が依頼して、大杉で一ケ所の田を坪単位で刈り、米の収穫量を予想した。

イネコキ　稲や麦を茎から取り去ること。脱穀すること。関連 ウススリ　稲の籾殻を取り去って玄米にすること。モミスリとも。

ハサカ゜ケ　刈り取った稲を乾燥させるためハサ(稲架)に掛けること。大杉では昔は8段で作った。関連 ノバサ　自分の家から離れた場所に立てた稲架。7段で作った。ハサノコ　稲架の横木。

ジボシ　籾を乾燥させるために玄関先のバンバ(家の前の場所)などに筵(むしろ)を敷いて干すこと。

マンワ　脱穀機が登場する前に使われた脱穀用の農具の名。

ムンカ゜ラ　麦藁。

コヌカ　糠。ウススリ(モミスリ)のときに出る米糠。

サク　「作」の意で収穫量をさして言う。例 サクカ゜ ヨカッタ(よく収穫できた)。関連 ダチカン〔形〕駄目だ。不作だ。

ミカ゜イル〔動・五〕　実が熟す。同じ実が熟す場合でも若干の使い分けがあり、柿の場合はウム〔動・五〕、栗の場合はヨーダ(栗のいがが開いて実が落ちそうになったこと)と言う。シャシャンバリ　栗を木から落とすための先の割れた竹。

ネツ　いもち病。関連 ヒエネツ　ミトク゜チ(用水から田への水の取り込み口)付近が冷えて発生したいもち病。

オドシ　かかし(案山子)。

ネカリカ゜マ　柄の長さが1m50cm位ある大きくて丈夫な鎌。シタカリカ゜マとも。関連 ターカリカ゜マ　稲を刈り取る鎌。ノコキ゜リカ゜マとも。

アジェヌリク゜ワ　田の畦塗りの仕上げに使う鍬。ほかに、土起こし用の先が三つに分かれたミツク゜ワ、畦塗りに使う先が四つに分かれたヨツク゜ワもある。

ニナワ　物を背負うときに使う縄。関連 マニラナワ　滑車に使う麻縄。杉の木起こしのとき使った。

スイノ　一番目の細かい篩(ふるい)。石臼で挽いたものを粉と皮に分けるときに使う。関連 トーシカコ゜ 目の粗い篩。

イズメ　藁で編んだ育児用の嬰児籠。

ムシコ゜エ　藁を切って積み重ねて腐らせ肥料にしたもの。堆肥。関連 シメカス　鰊(にしん)や鰯(いわし)などの魚をしめて田の肥料にしたもの。

ニナイボ　二人で物を運ぶときに二人で担ぐ棒。棒の真ん中に荷物を下げる。

ミズクルマ　米搗きに使った水車。

ミナクチ　用水から田への水の取り込み口。ミトクチとも。関連 ミズアケ　用水路に水を入れること。ユー　用水へ水を取り入れるための堰。シリント　田から水を出すための水の落とし口。ヨースイニンブ　用水に水を引くために掃除などの作業をする人夫。

ツツミ　灌漑用水の水を溜める溜池。

セータ　背負って物を運ぶための木製の道具。関連 カンザ　物を背負うための藁製の厚い背中あて。主に男性用。コモ　物を背負うための藁製の薄い背中あて。主に女性用。

エンロ　きざみ煙草を入れて腰に下げる入れ物。関連 タバゴ　煙草。

キダナ　刈ったまま山に積んでおく薪のこと。関連 ホエヤマ　ホエ(柴)をとる山。ホエソク　柴を束ねたもの。

タモケ　人糞を入れて運ぶための桶。

ガンバサミ　刃のついた罠。

カイコサマ　蚕。関連 ハルコ　春蚕。ナツコ　夏蚕。エメ　蚕を飼うための棚。ス　蚕を入れる竹で編んだ籠。クワコキ　蚕の餌の桑の葉を取ってくること。

ソコククリ　夏の暑い日に泳いでいて川の中に潜ること。

ヤマシ　林業に従事する人。「山師」の意。

3.17　＜勤怠・難易・経済＞に関する語彙

テカ　イノク〔慣〕　「手が(よく)動く」の意でまめなことを表わす。関連 テカッショナ〔ナ形〕仕事が早い。人より余計に仕事をする様子。

ドンダクレ　怠け者。

サンニョスル〔動・サ〕　計算する。支払する。「算用する」に由来する語。

ジェン　お金。「銭」から。関連 ジョーヨ　費用。よけいな出費という意味あいが強いことば。ジェンモチ　お金持ち。ダンショ、ショタイモチとも。オヤケ　財産家。シンダイ　財産。

マンゾ　村のかかり金の分担金。1年で盆と暮れの2回払う。

ソロバンカ　ツエー〔慣〕　「算盤が強い」の意でお金の使い方が上手なこと。

マドウ〔動・五〕　弁償する。マドーとも。

シンカイジェン　へそくり金。

ブンサンシル〔動・サ〕　破産する。

ヨクンボ　欲張り、あるいは欲張りな人。

アシェッゴシ　次々に用ができて忙しいこと。イソカシー、シェワシナイとも。

アッタラヤ〔ナ形〕　もったいない。「もったいない」の意の「あたら(可惜)」から。モッタイネーとも。

キョクナ〔ナ形〕　可笑しな。例 キョクナコト　ユー(可笑しなことを言う)。関連 ダラコキ　馬鹿なことばかり言う人。

カッリャスイ〔形〕　簡単だ。

3.18　＜助詞・助動詞・その他＞に関する語彙

「2.3 文法・表現」で概略記述したので省略する。

4. 大杉町方言の待遇表現

今回の調査では、大杉町方言の待遇表現の概要を知るために、方言研究ゼミナール編「待遇表現調査表」の調査項目を参考に、一人の老年層女性話者(能登君子氏　明治44年生まれ)の使用する待遇表現の記述を試みた。調査結果の詳細は、方言研究ゼミナール編『方言資料叢刊 第7巻 日本語方言の待遇表現（仮題)』(1997年秋刊行予定)に改めて掲載の予定であるが、本稿では尊敬表現を中心に調査結果の一部を報告する。

4.1 尊敬表現

ここでは、尊敬表現のうちでも直接の話し相手(対者)に対する敬語、**対者敬語**の表現をみる。以下、それぞれの項目で対人設定（A：親しい友人／B：近所の年長の人／C：土地の目上の人など)の後にカタカナで記した表現が調査で得られた回答である。

4.1.1 「おまえ(あなた)は元気かね」

A：親しい友人に　ワレ　ゲンキナカ
　　ワレ　ソクサイナカナー
B：近所の年長の人に(やや丁寧に)　オマエ　ゲンキナカイノー
C：土地の目上の人に(最も丁寧に)　オマエ　ゲンキナカイノー

ここでは「おまえ(あなた)」にあたる対称代名詞と「元気かね」にあたる部分に注目する。

対称代名詞については、ここでは相手により「ワレ」と「オマエ」の二つが使い分けられており、親しい同輩からそれ以下の相手には「ワレ」、同輩以上の目上には「オマエ」となるようである。現代日本語(共通語)の待遇表現体系では、「オマエ」は同輩から下の相手にしか使用しない対称代名詞と考えられるが、当該方言では「オマエ」が本来持っていた高い待遇価値を未だに残している点が注目される。当該方言では、最近は「アンタ」もよく使われており、待遇的にはワレよりも上、オマエよりも下になるようだ。これに似た状況は、東国方言の古態性をよく残しているとされる伊豆七島の南端の八丈島方言にも見られ、八丈島の老年層方言では「お前」から変化したと考えられる「オメー」が「アンタ」や共通語的「オマエ」よりも高い待遇価値をもって目上の相手に使われている。

「元気かね」にあたる表現では、親しい友人に対して「ゲンキナカ」および「元気」の意の古い言い方であろう「ソクサイ(息災)」を使った「ソクサイナカナー」が聞かれた。同じ親しい友人に対しても後者の方がやや丁寧な言い方であろう。一方、年長および目上の人には「ゲンキナカイノー」となる。文末部に注目した場合「～カ(イ)ナー」よりも「～カイノー」の方が丁寧な表現となるようだ。

4.1.2 「あしたは家に居るか」

A：親しい友人に　　アシタ　イエニ　オルカ
B：近所の年長の人に　アシタ(オマエ)イエニ　ゴザルカ
　　アシタ(オマエ)イエニ　ゴザルカイノー
C：土地の目上の人に　アシタ(オマエ)イエニ　ゴザルカイノー

ここでは、親しい友人に対する「オルカ」に対して、目上の相手には「ゴザルカ」「ゴザルカイノー」が用いられることがわかる。「居る」にあたる尊敬の動詞「ゴザル」は加賀地方の方言では白山麓の白峰村方言にも聞かれる古い形式で、小松市内でも平野部ではまず聞かれない言い方である。なお、「ゴザルカ」よりも「ゴザルカイノー」がより丁寧な表現であることは言うまでもない。なお、後掲の「5.大杉町方言の自然談話」の文字化資料にも見えるが、「いらっしゃる」「～ていらっしゃる」にあたる尊敬

表現としては「オイデル」「～テオイデル」もよく用いられているようだ。

また、これとの関連で、人が家を訪ねて来て夫の所在を尋ねられ「(主人は)居る」と答える場合の言い方も尋ねたが、それに対しては「オラッシャル」のように尊敬の助動詞「～ッシャル(～サッシャル)」を用いた表現をするとのことであった。現代日本語の敬語使用では身内の者に尊敬表現を用いるのは誤りとされているが、大杉町方言でのこのような用法は、かつて近畿地方を中心とした西日本方言に広く存在していたと言われる身内尊敬用法の名残とも言えるものであろう。これについては、後で身内敬語の表現と関連して改めて触れることにする。

4.1.3 「あした行くか」

A：親しい友人に　　アシタ　イクカ

B：近所の年長の人に　アシタ　イカッシャルカイノー

C：土地の目上の人に　アシタ　イカッシャルカイノー

ここでは、親しい友人に対する「イクカ」に対して、目上の相手には「イカッシャルカイノー」が用いられることがわかる。「イカッシャルカイノー」の「～ッシャル」は学校文法で言う五段活用動詞の未然形相当の形に接続して尊敬の意味を表す敬語助動詞である。小松市の平野部を含め金沢方言を中心とした加賀方言に聞かれる「行くマサル、行くマッシャル」等の「～マサル、～マッシャル」なども同じ尊敬の敬語助動詞である。今回の言語地理学的調査によれば大杉谷川流域では「～ッシャル」(一段型活用の動詞には「見サッシャル」「寝サッシャル」のように「～サッシャル」の形で接続)が大杉町から長谷町までの全域で使用されることが確認できた。一方、上り江町から大杉町までの上流部では聞かれない「～マッシャル」が、瀬領から下(しも)の地点(瀬領・波佐谷・長谷)に分布し、「～ッシャル(～サッシャル)」よりも丁寧な敬語助動詞として併用されていることもわかった。例えば、言語地理学的調査の結果から波佐谷町での「どこに行くのか」にあたる待遇表現(道ですれちがった相手に聞く場合。5つの対人設定に対する)を示すと次のようである。「行くのか」にあたる各表現形式の待遇度は、初対面の観光客に対する共通語的表現を除いて下にある対人に対する表現形式ほど高くなる。

近所の年下の知り合いに少しぞんざいに	ドコ　イケーン
仲のよい友達に	ドコ　イカンヤ
近所の年上の人にやや丁寧に	ドコ　イカッシャルンカ
	ドコ　イカッシャルンヤ
土地の目上の人に非常に丁寧に	ドコ　イクマッシャルカ
初対面の観光客に	ドコ　イカレルンデスカ

4.1.4 「それを見せてくれないか」

A：親しい友人に　　ミシテゲー（大杉中町）

　　ミシテクエ（大杉本町）

B：近所の年長の人に　ミシテガッシェンデ（大杉中町）

　　ミシテクヮッシェンデ（大杉本町）

C：土地の目上の人に　ミシテガッシェンデ（大杉中町）

　　ミシテクヮッシェンデ（大杉本町）

ここでは、依頼表現のバラエティーについてみることにする。

大杉町方言では「～てくれ」「～てくれないか」といった依頼表現に、上(かみ)の集落(大杉上町、大杉本町)と下(しも)の集落(大杉中町、下大杉町)で異なる表現が使用されるらしい。後掲の言語地図に見られるような単語レベルでならともかく、この種の表現でこのような狭い範囲に地域差が見られるのは興味深い。

話者の説明によれば、親しい友人などに対しては、話者の住む下の集落(大杉中町)では「～テゲー」のような言い方が、上の集落では「～テクエ」(「～テクェッカ」のようにも)のような言い方がされるとのこと。それが、近所の年長の人や土地の目上の人に丁寧に言う場合は「～テゲッシェンデ(～テゲッカ、～テゲンカのようにも)」(下大杉町)、「～テガッシェンデ」(大杉中町)、「～テクヮッシェンデ」(大杉本町)となると言う。この場合、「～テクエ」のクエはクレ[kure](呉れ)の[ｒ]が落ちた形であろうし、「～テゲー」「～テゲッシェンデ」のゲーはその[kue]の語頭が濁音化し、さらに[-ue]が[-e:]と変化したものであろう。また、「～テクヮッシェ(ンデ)」のクヮ[kwa]が[gwa]さらに[ga]へと変化したのが「～テガッシェ(ンデ)」であろう。

今回の待遇表現調査では、このような補助動詞としての「～てくれる」、あるいは本動詞としての「くれる」にあたる表現形として、他に「(友達が本を)見せてくれた」の意の「ミシテクエタ(大杉本町)、ミシテゲータ(大杉中町)」、「(近所の年長の人や土地の目上の人が本を)見せてくれた」の意の「ミシテクヮッシャッタ(大杉本町)、ミシテガッシャッタ(大杉中町)」、「(近所の年長の人や土地の目上の人が私に)くれた」の意の「ガッシャッタ(大杉中町)」、「(近所の年長の人や土地の目上の人に～と)言ってくれ」の意の「ユートイテガッシェ(大杉中町)」などが聞かれた。

4.1.5 その他の尊敬表現（第三者敬語）

尊敬表現の最後に、ある相手のことを別の人に話すとき、その話題の人である第三者に対する敬語がどのように用いられるかについて簡単にみておく。

例えば、親しい友人に「(ある人が)あしたは家に居るだろう」と話す場合に、ある人が次のような人であった場合の「家に居るだろう」の部分の言い方である。

A：(親しい友人が)　　イエニ　オルヤロー
B：(近所の年長の人が)　イエニ　ゴザルヤロー
C：(土地の目上の人が)　イエニ　ゴザルヤロー

大杉町方言の場合、このように第三者に対する敬語表現でも話題の人が目上の人であった場合には「オル」に対して「ゴザル」といった尊敬表現が使われるようだ。この「ゴザル」は補助動詞「～テゴザル(～ていらっしゃる)」の形でも第三者敬語としてよく用いられるらしく、他の第三者敬語の調査項目でも次のような形で現れている。

・近所の年長の人Aさんに「(別の近所の年長の人Bさん、あるいは土地の目上の人Bさんが)そう言った」と話す時：　ソー　ユーテゴザッタ
・親しい友人に「(近所の年長の人、あるいは土地の目上の人が) あそこに行っておられた」と話す時：　アソコニ　イッテゴザッタヨ
・親しい友人に「(近所の年長の人、あるいは土地の目上の人が) 今仕事をしている」と話す時：
　イマ　シゴト　シテゴザル

4.2 謙譲表現

今回の待遇表現調査では、大杉町方言のいわゆる謙譲の意味を担う表現形式は確認できなかった。例えば、ある相手に「私も元気だよ」と言うときの言い方は次のようである。

A：親しい友人に　　ウラモ　ゲンキヤ
　　ウラモ　タッシャヤ

B：近所の年長の人に　ウラモ　タッシャヤ

C：土地の目上の人に　ウラモ　タッシャデ　オルワンデ

この場合、まず「私」にあたる自称代名詞の部分は相手に関係なく「ウラ」が用いられている。また、「元気だよ」にあたる部分は、土地の目上の人に対して「タッシャデ　オルワンデ」が用いられているが、この「～ワンデ」という形は謙譲の意味を担うものではなく、共通語で言えば「です・ます」にあたる丁寧語と言うべきもののようだ。この「～ワンデ」は、他にも近所の年長の人や土地の目上の人に「(その荷物は) 私が持ちましょう」と言うときの「ウラ　モッテヤルワンデ (持ってやりましょう)」、相手に「駅で待っていますよ」と言うときの「エキデ　マットルワンデ」、土地の目上の人に「あした行くか」と聞かれて「行きます」と答えるときの「イクワンデ」、近所の年長の人や土地の目上の人に「今日は寒いね」と言うときの「サムイワンデ (寒いですね)」のような形で聞かれた。

4.3 丁寧表現

上で見たとおり、大杉町方言の特徴的な丁寧表現として共通語の「です・ます」にあたると思われる文末表現「～ワンデ」がある。用例も既に挙げたとおりで、目上の人に丁寧の意を添えるために多用されているようだ。

他に、終(文末)助詞「ナー」と「ノー」に関して、尊敬表現の4.1.1の最後でも触れたように待遇的な使い分けがあるらしく、次の例のように「ナー」は同輩の親しい相手に、「ノー」は年長や目上の相手に用いられている。

・退院した人に「(元気になって)よかったねえ」と言うとき

A：親しい友人に　　(ナオレテ) ヨカッタナー

B：近所の年長の人に　(ナオッテゴザッテ) ヨカッタノー

C：土地の目上の人に　(ナオッテゴザッテ) ヨカッタノー

4.4 その他

では最後に、今回の待遇表現調査項目の中で14通りの対人(相手)を想定してもらってその使い分けを尋ねた項目の結果をみておきたい。

・朝9時頃に近くの道路で次に挙げる人に出会ったときどのように挨拶するか。

1.	お寺の住職さん	オハヨーゴザイマス
2.	校長先生	オハヨーゴザイマス
3.	見知らぬ年配の男性	オハヨーゴザイマス
4.	見知らぬ年配の女性	オハヨーゴザイマス
5.	顔見知りの年上の男性	ジーチャン　エライ　ハヤイワンデ
6.	顔見知りの年上の女性	バーチャン　エライ　ハヤイワンデ
7.	10歳ほど年下の見知らぬ男性	オハヨーゴザイマス
8.	10歳ほど年下の見知らぬ女性	オハヨーゴザイマス
9.	同級生の男性	ワレ　アサ　ハヨーカラ　ドコ　イクンジャイ
10.	同級生の女性	ワレ　アサ　ハヨーカラ　ドコ　イクンジャイ
11.	10歳ほど年下の顔見知りの男性	ワレ　アサ　ハヨーカラ　ドコ　イクンジャイ
12.	10歳ほど年下の顔見知りの女性	ワレ　アサ　ハヨーカラ　ドコ　イクンジャイ
13.	近所の中学生の男の子	ワレ　ハヤイゼー　ドコ　イクンジャイ

14. 近所の中学生の女の子　　ワレ　ハヤイゼー　ドコ　イクンジャイ

これらの結果から、この話者は目上の相手や未知の相手に対しては共通語と同じ「オハヨーゴザイマス」を用いている。既知の年上の相手には親しみを込めて「ジーチャン」「バーチャン」と呼びかけた上で「エライ　ハヤイワンデ(えらく早いですね)」と丁寧な言い方をしている。それ以外の親しい同年配から年下の相手には、対称代名詞「ワレ」で呼びかけた後に「ドコ　イクンジャイ」と言っている。特に近所の中学生には「ハヤイゼー(早いなあ)」という、ややぞんざいな言い方とあわせて用いられている。

・朝9時頃に近くの道路で次に挙げる人に出会って挨拶した後、「どこに行くのか」と尋ねるとしたらどのように言うか。

1.	お寺の住職さん	ドコ　イカッシャルンジャイノー
2.	校長先生	ドコ　イカッシャルンジャイノー
3.	見知らぬ年配の男性	ドコ　イカッシャルンジャイノー
4.	見知らぬ年配の女性	ドコ　イカッシャルンジャイノー
5.	顔見知りの年上の男性	ドコ　イカッシャルンジャイノー
6.	顔見知りの年上の女性	ドコ　イカッシャルンジャイノー
7.	10歳ほど年下の見知らぬ男性	ドコ　イカッシャルンジャイノー
8.	10歳ほど年下の見知らぬ女性	ドコ　イカッシャルンジャイノー
9.	同級生の男性	ワレ　ドコ　イクンジャイノー
10.	同級生の女性	ワレ　ドコ　イクンジャイノー
11.	10歳ほど年下の顔見知りの男性	ワレ　ドコ　イクンジャイノー
12.	10歳ほど年下の顔見知りの女性	ワレ　ドコ　イクンジャイノー
13.	近所の中学生の男の子	ドコ　イクンジャイヤー
14.	近所の中学生の女の子	ドコ　イクンジャイヤー

まず「行くのか」の部分に注目すると、先の4.1.3「あした行くか」の説明とも関連するが、目上の相手、年長の相手、未知の相手に「～ッシャル」という尊敬の助動詞が用いられている。それに対し、親しい同年輩から年下の相手には「～ッシャル」のつかない「イクンジャイノー」、しかも呼びかけに親しみを込めた「ワレ」という対称代名詞が用いられている。それが近所の中学生になると「イクンジャイヤー」となり、「イクンジャイノー」の「ノー」より待遇価値の低い文末助詞が用いられている。

5. 大杉町方言の自然談話

ここに載せる自然談話の文字化資料は、調査2日目(10月2日)のお昼休みに調査会場であった大杉町の生活改善センターの一室で4名の話者の方がくつろいだ雰囲気で雑談しているのを録音し、その一部(約8分間)を表音的片仮名表記で文字化し、その下に共通語訳を付したものである。この種の文字化資料は、あわせて音声も聞くことができてさらに価値が高まる。近い将来、こうした文字化資料とあわせて、小松市立博物館で市内主要地点の方言音声が試聴できるようになることを期待したい。

なお、録音の文字化・共通語訳の草稿作成にあたっては、調査に参加した田中剛、谷沢香織、野村真一、古野愛子の協力を得た。

《凡例》

（1）それぞれの会話の冒頭に話者の略号（下記参照）を付した。

（2）録音の文字化は表音的片仮名表記で文節分かち書きとした。本稿では、アクセント・イントネーションについては省略した。当該方言では語中・語尾のガ行音は鼻濁音となるので、語頭のガ・ギ・グ・ゲ・ゴに対しカ゜・キ゜・ク゜・ケ゜・コ゜と表記した。

（3）録音内容が聞き取りにくい箇所や、内容不明の箇所には下に〰〰〰を付した。

（4）言い淀みの箇所には下に _____を付した。

（5）複数の話者の声が重なっている箇所には下に ＿＿＿＿ を付した。

（6）ある話者の会話中に別の話者が口を挟んだ箇所には（B　　）のように括弧を付して話者の略号とともに記入した。

（7）その他必要と思われる箇所には上に注番号を付し、末尾に注記した。

＜話し手＞

A　道端政己　男　大正6年生まれ　下大杉町
B　吉田元次　男　大正4年生まれ　下大杉町
C　杉本甚七　男　大正5年生まれ　大杉中町
D　杉本たか　女　大正11年生まれ　大杉中町

＜同席者＞

F　加藤和夫　男　昭和29年生まれ

A　ダイタイ　アノ　トシヨリヤサカイ　（笑）　ミミ(注1)ァ　トーイモンジャサカイ　ジブンノ　ユー
だいたい　あのう　年寄りだから　耳が　遠いものだから　自分の　言う

コトバッカデ　テレビト　イッショヤ　（笑）　ヨソノ　ヒトカ゜　ナニ　シツモンシタカッテ
ことばかりで　テレビと　同じだ　他の　人が　何　質問しても

ソリャ。　（笑）
それは。

B　シランネ。
知らないね。

C　イロンナ　ハナシ　マジェコジャ　ユーサケナ。　（笑）
色々な　話（を）まぜこぜに　言うからね。

B　ソレコソ　ワカ゜　イワンナンコトダケワ　コリャ　イワンナント　オモテ　ユートンニャ(注2)ロ
それこそ　自分が言わなければならないことだけはこれは言わなければと思って言っているんだ

（D　笑）〰〰〰ワケナー。コリャー　（笑）　ユワンナン　（笑）。
ろう。　これは　言わなければならない。

C　キョーシツミタイナ　ワケニワ　イカンノヤ。アイテト　トックミアッテ　（Fソーソー　ソー
教室みたいな　訳には　いかないんだ。相手と　取っ組み合って　（そうそう　そう

ソー）　センワケワカランヤー。
そう）　訳が分からないんだ。

A　コク　コクサイテキナ　コトモ　ハナシ　シェンナンシネー　（笑）　チイキテキナ　コトモ
国際的な　ことも　話　しなければならないしね。　地域的な　ことも

ハナシ　シェンナンシネー。　(笑)　ココニ　オイデル(注3)ヨーナ　ホラ　アノ　ガイジンサン。
話　しなければならないしねえ。ここに　いらっしゃるような　ほら　あの　外人さん。

アラ　リチャードサンチューント　(Fアー　ミチノ　ショー　ウン)　ガードサンチュートン
あれは　リチャードさんて言うのと　(ああ　道の　うん)　ガードさんて言うのと

ネ。アンタト　オンナシヤ　アノ　ガードサンテュ(注4)ノァンネー　アノ　アワズノ　ホーノ　タン
ね。あなたと　同じだ　あの　ガードさんて言うのはね　あの　粟津の　方の　短大

ダイノ　エーコ゜ノ　シェンシェー。
の　英語の　先生。

F　アノ　コマツタンダイノ。
あの　小松短大の。

A　オー。
うん

F　アー　ソーデスカ。
ああ　そうですか。

A　ソレカラ　アノ　リチャードサンテューノァ　ドッカ　アタカノ　ホーノ　ドリャ　コーバノ
それから　あの　リチャードさんて言うのは　何処か　安宅の　方の　どれだったか　工場の

アメリカトーノ　ツーヤクオ　シテオイデルミタイデネ　ヨル　イッテ　モー　ムコァ　アノ
アメリカとの　通訳を　していらっしゃるみたいでね　夜に　行って　もう　向こうは

コッチャ　ヨルデモ　ヒルヤサケネ　ソーユー　シコ゜ト　シテオイデルンデ。
あの　こっちは　夜でも　昼だからね　そういう　仕事(を)していらっしゃるので。

F　アー　ソーデスカ。イヤ　コノマエ　アノー　イッカケ゜ツホドマエニ　チョット　コチラ　ウ
ああ　そうですか。いや　この前　あのう　1ヶ月ほど前に　ちょっと　こちらに伺

カカ゜ッタ　トキニ　(A　オー)　アノ　クルマデ　ハシッテタラ　ガイジンサンカ゜　ソト
った　時に　(うん)　あの　車で　走っていたら　外人さんが　外に

ニ　デテ　(A　オー)　イエノ　マエニ　スワッテラシタカラ　(A　オー)　アー　ガイ
出て　(うん)　家の　前に　座っていらしたので　(うん)　ああ

ガイコクジンノ　ヒト　イル。
外国人の　人(が)いる。

A　ガイジンサン　ホイテ　シンシェツナ(注5)ケーネー　アノ　テー　アケ゜テ゛ネー(注6)　ワタシラ　サン
外人さんは　そして　親切だからねえ　あのう　手(を)挙げてね　私たちは　サン

キューシカ　オボエトランサカイ　(笑)　ソレヨリ　ユエンケンドネー　(笑)
キューしか　覚えていないので　それしか　言えないですけれど。

C　サンキューカ　ハローカ　シランケド　オモッシェー　コト　ユーワナー。
サンキューか　ハローか　知らないけれど　面白い　こと　言うよね。

D　アノー　オトーサンヤロー　ガート　アノー　サンキュァ。
あのう　お父さんだろう　あのう　サンキュー(って言うの)は。

A　ン　ン　ウーン　オトーサンモ　ユーシー。
うん　うん　うん　お父さんも　言うし。

D　リチャードサントコノ　オトーサン。
リチャードさんの所の　お父さん。

A　アノー　オー　オー　アー　アノ　ヒトモ　ネッシンナシ　(D　ン)　ソレカラ　イマノ　ガ
あのう　うん　うん　ああ　あの　人も　熱心だし　(うん)　それから　今の　ガ

ードサンモー　(D　ン)　コナイダ　トーッタラ　キレーンナッタデショーッテ　キーテ　オ
ードさんも　(うん)　この間　通ったら　きれいになったでしょうって　聞いて　お

ー　イヤ　スマートン　ナッタネーチュテ　ホラ　アッコ　ジェンブー　チョコッ。
お　いや　スマートに　なったねと言って　ほら　あそこ　全部　ちょっと。

D　ゲンカンモ　ナオイタンデ。
玄関も　直したので

A　カイシューシテー　トショカンノ　イリ　トショカン　コーミンカンノ　イリクチヤンネ　シュ
改修して　図書館の　公民館の　入りだね　修理

ーリシテー　ナカナカノ　ガイジンサン　シンシェツナシネー　カンシンジャッテ。
して　なかなか　外人さん　親切だしねえ　感心だって。

D　ホッレカ゜　オッカシーゾ　ムカシノ　カズキオケニ　ナンジャラ　イッパイ　イレテ。(笑)
それが　おかしいぞ　昔の　担ぎ桶に　何やら　いっぱい　入れて。

A　ウン　ソシテネー　ムカシャー　アノー　ホラ　ビールノ　オケヤトァ　シェメンダルミタイナ
うん　そしてね　昔は　あの　ほら　ビールの　桶やとか　セメント樽みたいなも

アッタワンネ。
のが　あったよね。

F　アー　アリマシタネ。
ああ　ありましたね。

A　アレカ゜　アノヤ　シモオースキ゜ノ　ミセ　シタ　ヒトァ　タクサン　アッテ　ホシテ　ステ
あれが　あの　下大杉の　店(を)した　人が　たくさん　あって　そして　捨て

ル　ヒトッタラ　アノ　ヒトァ　キテ　コレー　イラーンーカンネトッタサケー　オー　イラン
る　人と言ったら　あの　人が　来て　これ　いらないかなって言ったから　ああ　要らな

ノヤッテ　オ　ワ　ボク　モロテクカッチュテ　(D　笑　ホヤ)。
いんだって(言ったら)僕　貰っていくかと言って(そうだ)

C　アレ　クキ゜　イレタンデネーカ。
あれ(は)釘(を)入れたんじゃないか。

A　クキ゜　イレタッタカ゜ヤ。　オー　ヤモンメシ　ヤマモトサンノ　(Dン　ン　ン　ン)
釘(が)　入れてあったんだよ。うん　山本さんの　(うん　うん　うん)

(Cオー)　ワカイサンカ゜　ンナ　アノー。
(うん)　若い人が　みんな　あのう。

C　クキ゜　クキ゜　イレタントー　(A　オー)　ソノ　サキニ　イチバン　サキニャ　シェメン
釘　入れたのと　(うん)　その　前には　一番　最初には　セメント

トヤッタンヤ。(D オー)
だったんだ。　(うん)

A　オー　ソーソー　シェメントヤ。
　ああ　そうそう　セメントだ。

B　ソー　シェメントヤ。
　そう　セメントだ。

A　デモ　シェメン　シェメント　(B　ワシラ　コンナ　ハジメテ)　(C　シェメントァ　デカカッタゾ)　シェメントヤトー　ワシラ　カンデ(注7)　アルケンワ。
　それでも　セメント　(私たち　こんな　はじめて)　(セメントは　大きかったぞ)　セメントだと　私(は)　担いで　歩けないよ。

B　アー　ホーカ～～～～。
　ああ　そうか　。

A　アレァー　オーキー　オーキー　イシカ゜ネー。
　あれは　大きい　大きい　石がね。

B　ムカシャ　アーユモンニ　イレテ　カンデ　アルイタンヤ。
　昔は　ああいうものに　入れて　担いで　歩いたんだ。

A　イマワ゛ネ　ムカシャーネ　アノ　クキ゜バコニネ　イマノ　ホラ　イマカッテ　アノー　ビールノ　シェンメンダルミタイナ　アルワ゛ネ。アレオ　アコノ　ガードサンカ゜　モロテイッテルの　セメント樽みたいな(ものが)あるよね。あれを　あそこの　ガードさんが貰って行って
　アー　グ(注8)ァイジンサンニ　モッテコイノ　コリャ　シナモンジャワイッテ。
　ああ　外人さんに　もってこいの　これは　品物だよって。

D　(笑)アノ　ヒト　ナンデモ　ウン。　(A ン)
　あの人(は)　何でも　うん。　(うん)

B　ヨー　ホシン　イクンカ。　(D ヨー　セオーテ)
　よく　行くのか。　(よく　背負って)

C　ソヤケドー　アノ　カミノ　フクロニ　ナランサキニー　シェメントァ　アーユー　デカイ　オケヤッタンヤ。
　だけど　あの　紙の　袋に　ならない前に　セメントは　ああいう　大きい　桶だったんだ。

A　ウン　ソーソー　オケヤッタ。
　うん　そうそう　桶だった。

C　アレ　モ　コラエテ　アルクノァ　ヤットミタイナモンジャッタ。
　あれ(を)こらえて　歩くのは　やっとみたいなものだった。

A　ウン　ソーソー　ウーン。
　うん　そうそう　うん。

B　ソヤ　ソヤ。
　そうだ　そうだ

C　アノ　ア　アトネァ　タンクノ　フクロヤッタンカイ。
　あの　あとには　袋だったのかい。

A オー ワタシラントコ アレデ (C マッサキニ アレー キノ オケヤッタンニャ) ウン
ああ 私たちの所 あれで (真っ先に あれは 木の 桶だったんだ) うん

ソーヤ。
そうだ。

C ソレカ゜ ヤッパリ クキ゜ノ ハイットル アノ オケミテーナ コ ワノ ハイッタ オケ
それが やっぱり 釘の 入っている あの 桶みたいな こう 輪の 入った 桶で

デー ジョーホーカラ ワー ハメタンニャ。
上方から 輪(を)はめたんだ。

A オー ソー ソー ソリャ アルナ。
ああ そう そう それは あるね。

C ドッカデ シェメン イレテ〜〜〜。
どこかで セメント 入れて 。

B カワッタン。
かわったの。

C ソッデ ダイブン カワッタンヤ。ソッデ マー アノ ドコヤラー アッコノァ イマー シ
それで 大分 変わったんだ。それで まあ あのう どこか あそこのは 今 青

ェーネンノイエノ シタノ ナカンバノ ヨースイ コッシェル ジブンニァ アレオ カミン
年の家の 下の 前庭の 用水を 作る 頃には あれを 紙の袋

フクロン ナッテ (A ン) ンデ アノ ゴマイデー ゴマイ アット ソンナカエ シェ
に なって (うん) それで あの 5枚で 5枚 あると その中へ セメ

メント イレタンカ。
ントを 入れたのか。

A ソーソー ナンマイモ コー アワイテ アッタワイネ。
そうそう 何枚も こう 合わせて あったよ。

C オンナジ カミァ アンタ ゴマイ カサナットッタン。(A オー) ソ ソッデ マー ワ
同じ 紙が あなた 5枚 重なっていた。 (ああ) それで まあ 割

ッリャイ ソッデ ハモノ アテリャ オンナシヤケド。ワッリャイ タッシャナ モンジャ。
合 それで 刃物を あてれば 同じだけれど。 割合 丈夫な ものだ。

アトデァ サンマイホドニ ナッタンカ。
あとでは 3枚ほどに なったのか。

A イマ アノ ア アミノカ゜ ハイットルワ チョット。(C ア ソーカ) アノー ボー
今(は)あの 網が 入っているよ ちょっと。(あ そうか) あのう 防湿

シツノネー シェメンブクロン ナカエ ウスイ ヤツカ゜ シッケ ウケンヨーニネ
のね セメント袋の 中へ 薄い ものが 湿気(を)受けないようにね

(Fハイハイ) ソッデ ソレデ ダンダン ネカ゜ タカク ナッテ ワタシラ オトナン
(はいはい) それで だんだん 値段が 高く なって 私たち(は)大人に

ナルシ ハジメワー アノ ロクジュッキロヤッタノ ソン ツキ゜ァ ゴジュッキロ ナッテ
なるし 初めは あの 60キロだったの(が) その 次は 50キロ(に) なって

イマ　ヨンジュッキロ　ヤ　ヤッパリ　オンナシニ　オモテー　(D 笑)　ジブンガ゜　トシ
今（は）　40キロ。　やはり　同じに　重い　自分が　年を

イッタッチュコトァ　(笑)　チカラガ゜（笑）
とったということは　力が（入らない）

D　ソーリャソヤ。　ウン　イマデァ　ロクジュ　ロクジュッキロデァ　ウケレン。
それはそうだ。　うん　今では　60キロでは　担げない。

A　オモーイ　ロクジュッキロデモ。
重い　60キロでも。

F　ムカシ　ヨク　ロクジュッキロノ　コメダワラ　カツキ゜マシタヨネー。
昔（は）よく　60キロの　米俵　担ぎましたよねえ。

A　オー　ソーソー。　ムカシワ　アノ　ロクジュッキロ　ジューロックゥンカイネー。　ウン。
おお　そうそう。　昔は　あの　60キロ　16貫かねえ。　うん。

D　イヤ　オナシ　ロクジュッキロデモ　コメダワラナラ　ウクカモシレンケド　(F アー　ソー)
いや　同じ　60キロでも　米俵なら　担げるかもしれないけれど

シェメントノ　フクロデァ　トテモ　ウケン。(F アー)　ウン。
セメントの　袋では　とても担げない。(ああ)　うん。

A　モチニクイワネー。
持ちにくいよねえ。

B　テー　カケットコガ゜　ツコ゜ーワルイナー。
手(を)掛けるところが　うまくいかない。

F　ソーデスネ。
そうですね。

D　オー　ホヤー。　カミノフクロデァ。(B ムカシ)
うん　そうだ。　紙の袋（では）。　(昔)

F　ムカシ　ワタシ　タワラワ　テー　カケルトコロ。
昔は　俵は　手(を)掛けるところ(がありましたよね)。

B　タワラデ　(A オー　ソーソー)　ロクジュッキロノ　ウー　コメノ　リョーテオ　ズーット
俵で　(おお　そうそう)　60キロの　米(俵)の両方を　ずうっと

カタンデ。
担いで。

C　アレァ　ホヤケド　ウマク　ナワ　カカッテ　タテナワ　カカットルヤロ。　ワッリャイ　ア
あれは　そうだけれど　うまく縄(が)掛かって　縦縄(が)掛かっているだろう。　割合

ケ゜ンヨー　ユーコトァ　アケ゜ルケド　バンモチイシッチュノァ　ナワ　ナンモ　カケトラン。
言うことは　上げるけれど　バンモチ石というのは　縄(も)何も　掛けてない。

(E ン　ン　ン)　ホーデネ　ナカ゜サー　ネーンジャ。(D 笑)
(うん　うん　うん)　それでね(石の)長さ(も)ないんだ。

B　モー　シナモンニヨッテ　ジェッテー。
もう　品物によって　絶対(違うよ)。

C　シェメントモ　ソノ　ドコヤラシカ　ツカムトコァ　ネーサケ　カミノ　フクロワ。
　セメント(袋)も　その　どこかしか　つかむところが　ないから　紙の　袋は。

D　カミノ　フクロワ。
　紙の　袋は。

A　シェンシェーカ゜タワ　アノ　バンモチイシーッテ　シッテオイデルカ。
　先生方は　あの　バンモチ石って　知っていらっしゃるか。

F　アー　シッテマス。アノー　ヤッタコト　アリマス。
　ああ　知ってます。あのう　やったこと　あります。

A　イマデモ　アノー　ヤッパ　イシノ　コノ　マルイ　ヤツオ゛ネ　コノヘンニモ　マダ　オミヤ
　今でも　あのう　やはり　石の　この　丸い　やつをね　この辺にも　まだ　神社の

　サンノ　トコニ　アンナー　ムカシ。(F　アー)
　所に　あるね　昔。　(ああ)

B　シトビョー(注9)　ゴッツイヤツ。
　4斗俵（ほどの）大きいやつ。

A　オー　ゴッツイヤツ　ソノ　メカ゜タ　(B　゛ナ　トッテアルワナ)　オイテアルネ。カタンダ
　おお　大きいやつ。　その　重さ　(みんな　とってあるよね)　置いてあるね。担いだり

　リ　(B　アーユー　モノァ)　ソーユー　ムカシノ　イシェキデァ　ナイカ゜ヤケド　チカラ
　(ああいう　ものは)　そういう　昔の　遺跡では　ないのだけれど　力試し

　ダメシノ　ソノー　ネー。
　の　その　ねえ。

D　コッチニ　オッタ　ネーチャン　トヤマ。　(F ソーデスネ)　ン。(B アー　チョッ)
　こっちに　いた　女性は　富山。　(そうですね)　うん。(ああ　ちょっと)

A　マ　トヤマノ　コトバネ　アノ　コレデ　クスリヤ　バイヤクノ　(F ハイ)　アノ　マワッテ
　まあ　富山の　言葉ね　あの　これで　薬屋　売薬の　(はい)　あの　廻って

　イレッサケ　ワリカタ　ハナシモ　ワカリヤスイシネ　キキヤスイシネ。
　(薬を)入れるから　割合　話も　わかりやすいしね　聞きやすいしね。

F　マー　フクイニ　クラベルト　ヤッパ　トヤマト　カナ　イシカワノホーカ゜　ニテマスカラネ。
　まあ　福井に　比べると　やはり　富山と　石川の方が(言葉が)似てますからね。

A　ウン　ソーソー　ソーユー　カンケーモ　アッテネ。
　うん　そうそう　そういう　関係も　あってね。

A　フクイノー　コトバデ　アノ　チョット　コノヘンノ　コトヨリ　シナヤコーンヤネ(B　ソー)
　福井の　言葉は　あの　ちょっと　この辺の　ことより　しなやかだね。　(そう)

　ユーコトカ゜　(F　ソーデスカ　笑)　ンー　シナヤコーンヤネ。
　言うことが　(　そうですか)　うん　しなやかだね。

D　ココワ　ホンマニ　ナコ　ナンコァ　コトバカ゜　アライ　トコデー　(A　ウーン)　ンー。
　ここは　本当に　言葉が　荒い　所で　(　うん)　うん。

　アライー。
　荒い。

A　ホイテ　コノヘンノ　アノー　チョット　アライシネー。　アノ　シンマルムラ　イクトーンネ
そして　この辺の　あの　ちょっと　荒いしね。　あの　新丸村まで　行くとね

(F　ハイ)　コトバワ　ジョーヒン　ナル　(B　ジョーヒン　ナル)　アト　フクイネ　チカ
(はい)　言葉は　上品に　なる　(上品になる)　あと　福井に　近い

イ　カンケーカ　アー　カカ゜ノ　ヒャクマンコ゜ク　ヒャクマンコ゜クノ　ジョーカカ゜(注10)イヤ
関係か　ああ　加賀の　百万石　百万石の　城下外だったんだ

ッタンヤ　アッコワ　チョード　ムカシデユー　アノ　シャンハイノ　ショクミンチミタイモン
あそこは　ちょうど　昔で言う　あの　上海の　植民地みたいなものでね

デネ　カカ゜ノ　ヒャクマンコ゜クァ　アコニ　ケンリァ　ナカッタンニャ。　アコエ　ンデ
加賀の　百万石は　あそこに権利は　なかっだんだ。　あそこへそれで

ドロボーシテ　ニケ゜テ　ハイッテモ　カカ゜ノ　トノサン　トメレナンダ。　フクイノ　ホー
泥棒をして　逃げて　入っても　加賀の　殿様は　止められなかった。福井の　方か

カラ　ヘーケァ　ニケ゜テキテンネー　ホイテ　モーヒトツワンネー　ワタシラー　シランケドネ
ら　平家が　逃げてきてね　そして　もう一つはね　私たちは　知らないんだ

コノヘンニ　イチョーノキカ゜　タクサン　アルッ。コレワ　アノ　ヘーケノ　オチムシャカ゜
けれど　この辺に　銀杏の木が　沢山　ある。　これは　あの　平家の　落武者が

ジブンラ　ニケ゜テキタ　トコニ　イチョーオ　ショーレーシタンデ　ソレデ　コノヘンネモ
自分たち(が)逃げてきた所に　銀杏を　奨励したので　それで　この辺にも

オチムシャカ゜　スコシ　キトッタンデナイカ。ソー　ユーテ　ハナシ　サレタン。ンナ　ヨッ
落武者が　少し　来ていたのではないか。そう　言って　話しを　なさった。そんな

ポ　ワタシラ　(D　笑)　ソンナ　コトァ　ハナシテ　イチョーノキァ　イチョー　ナルサカイ
私たち(は)　そんな　ことは　話して　銀杏の木は　銀杏(の実が)なるから

ユエタンデナイカト　オモトッタンケンド　ヤッパリ　ソーユー　カンケーデ　コノ　コノ　オ
植えたのではないかと思っていたけれど　やはり　そういう　関係で　この

ースギノ　ホーカラ　シンマルムラネ　イチョーノキカ゜　ヨケー　アルンデナイカ。ソーユー
大杉の　方から　新丸村に　銀杏の木が　たくさんあるのではないか。そうい

コトモ　ユー　ヒト　オイデタネー。
うことも　言う人(が)いらっしゃたねえ。

F　シンマルワ　イマデモ　イエ　アノ　スンデラッシャル　カタ　ダイブ　イルンデスカ。
新丸は　今でも　あの　住んでいらっしゃる方　大分　いるんですか。

A　アノーンネー　イマワンネー　フユワネー　(F　ハイ)　ナカダッチュー　イ　ヒト　イッケン
あのね　今はね　冬はね　(はい)　中田という　人　1軒

イワナノ　ヨーショク　(F　アー　イワナ　ハイハイ)　シテオイデルンデー　ナツワー　ゴ
岩魚の　養殖　(ああ　岩魚　はいはい)　していらっしゃるので　夏は　5・

ロッケン　(F　アー　ソーデスカ)　ジブンノ　ザイサンカ゜　ホラ　モッテオイデッサケ
6軒　(ああ　そうですか)　自分の　財産が　ほら　もっていらっしゃるから

(F　ンー　ハイ)　キテー　スンデルケド　フユワー　ナカダサン　(F　アー)　イッケン。
(うん　はい)　来て　住んでいるけれど　冬は　中田さん　(ああ)　1軒。

ホシテー　アノ　スルカ゜ニモ　フユワ　ダレモ　オランカ゜ヤ　ハナタテマチ（F アー ハナ
そして　あの　にも　冬は　誰も　いないんだよ　花立町　ああ　花立

タテ　ハイ）　デ　マルヤマーネァ　ニケンホド　オイデルンデ　イマモ　オイデッカナー
はい。）　で　丸山には　２軒ほど　いらっしゃるので　今もいらっしゃるかなあ。

フユ。
冬。

C　マー　フユワ　アノ　ソヤンド。
まあ　冬は　あの　だけども。

A　ホトンド　オランノヤ。
ほとんど　いないんだ。

B　オランノヤリャコソニァ　シンボネァ　ナツダケヤゾ。（F　ン　ン）（A　アー　ソー）　ナツ
いないらしいことには　新保には　夏だけだぞ。（うんうん）　ああ　そう）　夏だ

ダケ　イッケン　（A アノー）　フキョー　シトル。
け　１軒　（あのう）　している。

A　セ　シンマルムラヤ　マルヤマネ。　ナツワー　ゴロッケン　（F　アッ　ソーデスカ）　アノ
新丸村や　丸山ね。　夏は　５・６軒　（あっ　そうですか）　あの

キテオイデルワネ　（F　アー）　アノ　ヤマノ　クゥンリスルトカッテネ。
来ていらっしゃるよね。（ああ）　あのう　山の　管理するとかってね。

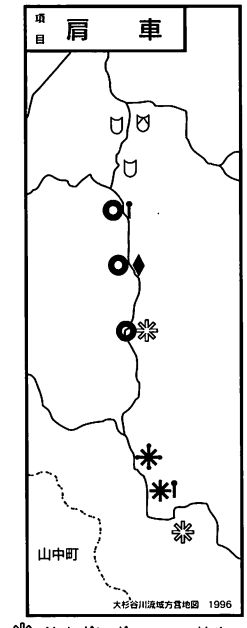
（注１）本来ミミカ゜と発音されるところだが、カ゜[ŋa]の[ŋ]が弱化して母音のアだけが軽く添えられるように発音されている。この種の現象は助詞「カ゜」のほか「ワ(は)」にあたる部分でもシェメントァ(セメントは)のように現れやすい。
（注２）ニャロはユートンヤロ(言っているんだろう)のヤロ(推量の助動詞)が前に撥音ンがきたためにニャロに変化した例。福井県嶺北地方の方言でも同様の現象がみられるが、金沢近辺の北加賀方言ではまず聞かれない現象である。
（注３）ここでは「居る」の尊敬語オイデル。ほかに「行く」「来る」の尊敬語として、また補助動詞～テ(デ)オイデル(～ていらっしゃる)の形でも使われる。福井県嶺北地方から石川県にかけて広く用いられる。
（注４）テユー(と言う)が普通はリチャードサンチューント(リチャードさんと言う人と)のようにチュー[tʃɯ:]となるが、ここでは[tjɯ:]のような発音となっている。
（注５）シンシェツナサケー(親切だから)のサケーのサが落ちた形。
（注６）文節末や文末の本来助詞が現れる部分でそれが省略され、そのかわりに北陸方言独特の揺れるような間投イントネーションが現れるが、その部分に終助詞ネが入った場合、ネの前に短くンが挿入される現象。話者Ａ道端氏の会話にしばしば現れている。金沢方言では比較的若い世代中心の新しい現象であるので、当該方言で老年層から聞かれるのは興味深い。
（注７）「担いで」の意味のカンデは、当該方言以外に白山麓の白峰方言などでも確認できるが、動詞の終止形に当たるもの(カンデとなり得る「担ぐ」の意味のカク゜・カム・カヌ)が存在せず、～テ形の時のみカンデの形で定着したものか、あるいはこの談話資料中にも見られるカタク゜(担ぐ)がテに接続したカタンデのタの落ちた形であろう。
（注８）グゥイジン(外人)のグゥはかつての歴史的仮名遣いの「ぐゎ」にあたる発音の残存。当該方言をはじめ石川県内の方言では老年層を中心に合拗音「くゎ」「ぐゎ」にあたる発音がクゥを中心に比較的よく残っている。
（注９）米が４斗(約60キロ)入る俵。
（注10）旧新丸村が白山麓の白峰村などと同様、加賀藩の支配を離れた天領であったことを言っている。

6. 大杉谷川流域の方言分布

先述のとおり今回の小松市方言調査では、市内の方言の地域差を明らかにする目的で5年間かけて市内全域および周辺地域の言語地理学的調査を行うことにした。最終的には少なくとも100地点以上の分布調査を予定しているが、今年度はまず手始めとして大杉谷川流域の8地点で調査を行なった。わずか10数キロの範囲にある8地点の調査でそれほどの地域差は期待していなかったが、結果を整理してみると意外にも多くの語彙項目で地域差が確認できた。本稿では、そのような項目の中から12項目を選んで言語地図(方言地図)を示し、若干の解説を付した。

6.1 肩車

全域に前部要素に「サル」を含んだ方言形が分布するが、その中でも、赤瀬町より上流の地点にサルボンボ類(サルボンボ、サルブンブ、サンノブンブ)、赤瀬町から下流の瀬領町までサルマワシ、さらに下流の波佐谷町・長谷町にサルマキ、サルマクが分布している。サルマキ、サルマクはサルマワシから変化したものと考えられる。北陸地方にサル～類の「肩車」をさす方言形が多く分布するのは、かつて農閑期などにこの地方をめぐり歩いた伊勢の大神楽の芸の中に人が猿を肩車するものがあったためらしい。上り江のハツンマは北の辰口町やそれに隣接する寺井町東部、小松市北部などにも点々と分布している。川北町では正月1月20日に行われる行事(各家の玄関先に福俵を投げ込んだり、そこで餅を貰ったりする)をハツンマと言うので、何かそうした行事内容と関連があるのかもしれない。



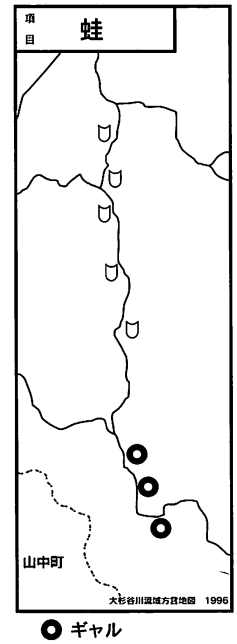
サルボンボ　サルマキ
サルブンブ　サルマク
サルノブンブ　ハツンマ
サルマワシ　カタグルマ

6.2 蛙

上流部大杉町3地点のギャルと赤瀬町より下流部のギャワズの分布にはっきり分かれている。ギャルの方が古い方言形と思われる。

6.3 おたまじゃくし

共通語形と一致するオタマジャクシを除くと、すべて「ギャル(蛙)のコ(子)」の意の方言形で、ある。瀬領町から上流部の4地点に分布するギャルコが中では古い方言形で、ギャリコ、ギャレコはそれからの変化形。またジャルコ、ジャリコもそれぞれギャルコ、ギャリコの語頭音が変化した音声変種である。一方、ギャルノコを経て変化したのが波佐谷町のギャンノコ、さらにそれの変化がジャンノコであろう。



ギャル
ギャワズ

6.4 あめんぼ

赤瀬町を境に、上流部のアブラキカカサ、アバイカカサ、アッバサ、アッパサ、アッバヤ、アッパヤの類と、下流部のミズスマシ類(ミズスマシ、ミズサマシ)が対立した分布を見せる。両勢力が衝突している赤瀬町には両類の方言形が分布している。アッパサ、アッパヤはそれぞれアッバサ、アッバヤからの変化形。

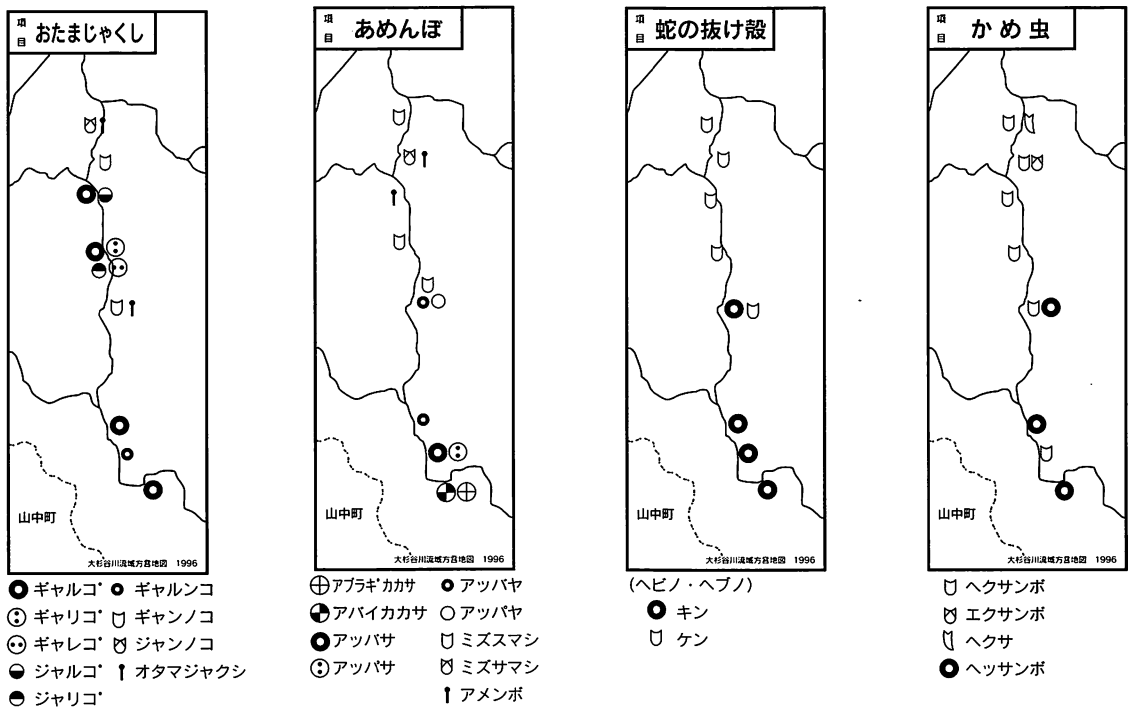
6.5 蛇の抜け殻

この方言地図でも赤瀬町が上流部に分布するキンと下流部に分布するケンの接触地点となっていて、赤瀬町にのみキンとケンの両形が見られる。一部の話者も説明しているとおり、蛇の抜け殻を蛇の衣服に見立てて「蛇の

衣(きぬ)」と言っていたものが上流部のキンとなり、さらにそれが下流部でケンに変化したものであろう。ちなみに、沖縄の首里方言では衣服のことをチン(キヌからの変化)と言う。

6.6　かめ虫

誰もが一度や二度は触って嫌な臭いの被害にあっているであろう、あの「かめ虫」の名前である。大まかに言えば、ここでも赤瀬町から上流部に分布するヘッサンボと、同じ赤瀬町から下流部に分布するヘクサンボ類の対立分布の様相を呈している。ヘクサンボ類のうち波佐谷町のエクサンボ、長谷町のヘクサはいずれもヘクサンボからの変化とみられる。上流部の勢力ヘッサンボもまたヘクサンボからの音声変種として後に生じたものであろう。



6.7　雪渡り

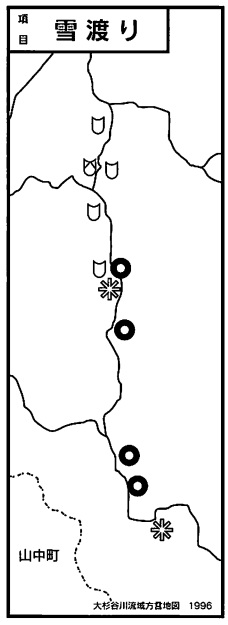
雪国に暮らした者であれば、子どもの頃の楽しい遊びとして記憶に残っているであろう「雪渡り」(冬の晴天の寒い朝、雪が固く凍った上を歩いて遊ぶこと。共通語形は存在しないと思われる)の分布である。この分布も大きく分けて2つの分布領域からなる。上り江町から上流部に分布するソラ～類(ソラノビ、ソラアルキ)と上り江町から下流部に分布するオショラキ類(オショラキ、ショーラキ)である。瀬領町の話者の一人が「オショラキはオソラアルキが縮まった形」と説明しているが、おそらく正しいであろう。ソラ～類のソラは(雪の)上の意の「空」に由来するものと思われる。従って、上流部のソラアルキが古く、それから変化したものがショーラキ、オショラキであろう。ちなみに、筆者がかつて調査した辰口町全域、およびそれに隣接する寺井町東部・小松市北部、さらには川北町にもソラアルキの広い分布が見られる。また、筆者の出身地である福井県武生市ではオショラキに似たオシャラ(ンノル)であった。

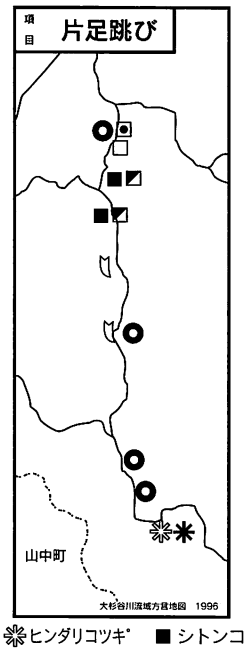
6.8　片足跳び

大きく4つの分布領域に分けることができる。まず、最上流部の大杉本町に分布するヒンダリコツキ゜・ヒンダリコツキ、次に大杉中町から赤瀬町(飛んで長谷町にも見えるが)にかけてのケンケン、さらに赤瀬町、上り江町のチンカラ、そして瀬領町から長谷町にかけてのヒトンコ類(ヒトンコ、ヒコンコ、シトンコ、スッコンコ)である。形態的にはどの類とどの類が関係するとか、どの類がどの類から変化したとかは考えにくく、それぞれの領域で独自に分布を広げたものと考えておきたい。

6.9　つむじ(旋毛)

一般に後頭部のてっぺんにある毛の渦巻いた部分の名称の分布である。上り江町のギリを除くと、ここでもやはり赤瀬町を境に、上流部のズイの類(ズイ、 ズリ、ズコ、ズイダレ)と下流部のチリの分布に分かれる。ズイの類が古いであろう。チリの分布は、小松市北部から寺井町東部、さらには辰口町全域から川北町にかけて広く分布するチリに連続するものであろう。

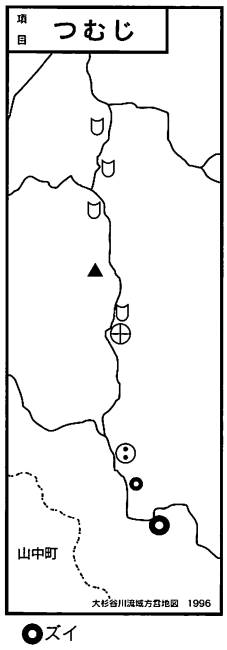




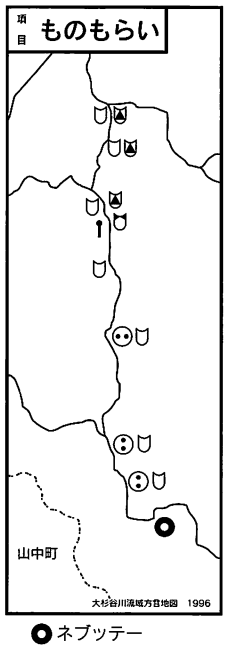
ソラノビ
ソラアルキ
オショラキ
ショーラキ
ヒンダリコツキ
ヒンダリコツキ
ケンケン
チンカラ
シトンコ
ヒトンコ
ヒコンコ
スッコンコ

6.10　ものもらい（麦粒腫）

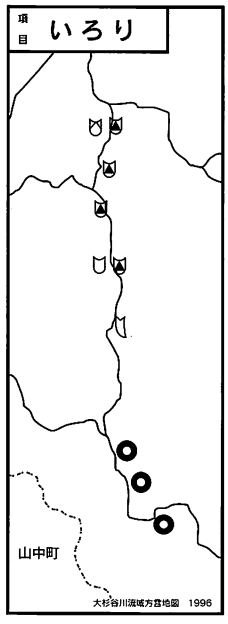
「ものもらい」とは、まぶたの縁に小さくできる腫れもののことである。分布図を見ると、最上流部の大杉本町を除いて全域に分布の見えるメモライ類(メモライ、エモライ、イモライ)と、赤瀬町から大杉町３地点にのみ分布の見えるメブッテー類(メブッテー、メブッテ、ネブッテー)の２つの勢力がある。メモライ類は福井県北部から石川県加賀地方・富山県にかけて広く分布する北陸共通語とも言える語形(エモライ・イモライはメモライから変化したもの)で、おそらくメブッテー類よりは新しいものであろう。なお、調査では「ものもらい」を治すための民間治療法の伝承内容もあわせて尋ねたが、それによると、全域に「火で温めた木やセルロイドの櫛で撫でると治る」といった伝承が分布する一方で、赤瀬町から長谷町までの下流部ではそれに加えて「藁のぬいごで輪を作り言葉を唱えて火にくべると治る」といった伝承の分布が見える。おそらく、後者の伝承の方が新しく生まれたものなのであろう。



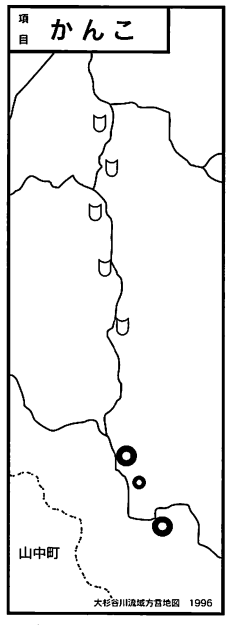
ズイ
ズリ
ズコ
ズイダレ
チリ
ギリ



ネブッテー
メブッテー
メブッテ
メモライ
エモライ
イモライ
メーボ



ジロ
エロ
エロリ
イリリ
イロリ



カブ
カーブ
カンコ

6.11　いろり（囲炉裏）

今や田舎の家からもほとんど消え去ろうとしている「囲炉裏」の呼称の分布である。上流部の大杉町3地点にはジロが分布している。このジロは白山麓の白峰村などにも分布する古い語形である。それに対し上り江町から下流部ではジロよりも新しい語形であろうイロリ類(イロリ、イリリ、エロリ)が分布する。なお、赤瀬町のエロは、もしかするとジロとエロリが併存したために混交形として生じたものかもしれない。

6.12　かんこ（ブヨよけ）

「雪渡り」と同じく共通語形は存在しないのだろうが、「かんこ」とは日中の野良仕事のときにとんでくるブヨを近づけないために綿の布を棒状に丸めて火をつけたものの名である。分布図を見てのとおり、上流部の大杉町3地点にはカブ・カーブが分布し、赤瀬町から下流部にはカンコが分布する。カブ・カーブは「蚊火」からの変化かもしれない。上流部に分布するカブ類の方がカンコより古い語形と思われる。

7.　おわりに

以上、小松市立博物館方言調査委員会の委託を受けて今年度行なった大杉谷川流域方言調査の報告をひとまず終える。当初の予定よりも大幅に紙数を超過してしまったが、アクセントを含む音韻、文法・表現法をはじめとして、まだまだ決して十分な記述とは言えないものである。残された点に関しては小松市全域の調査を終えるであろう5年後に予定されている最終報告書で補いたいと考えている。

【主要参考文献】

岩井　隆盛（1961）「方言の実態と共通語化の問題点　富山・石川」(『方言学講座 第3巻 西部方言』 東京堂出版)

加藤　和夫（1992）「石川県辰口方言の動態－十年間の変化と世代差」(『金沢大学語学・文学研究』第21号　金沢大学教育学部国語国文学会)

加藤　和夫（1995）「石川県能美郡 川北町の生活 言葉」(『川北町史 第一巻 自然・生活編』 川北町役場)

加藤　和夫（1996）「白山麓白峰方言の変容と方言意識」(『平山輝男博士米寿記念論集　日本語研究諸領域の視点 上巻』明治書院)

川本栄一郎（1978）「加賀市の方言」(『加賀市史 通史 上巻』 加賀市役所)

川本栄一郎（1983）「石川県の方言」(『講座方言学6　中部地方の方言』 国書刊行会)

佐藤　　茂（1983）「辰口町のことば」(『辰口町史 第一巻 自然・民俗・言語編』辰口町役場) ＊言語地図の作成および「辰口町方言の動詞活用表と解説」を筆者が担当

新田　哲夫（1985）「加賀地方における2モーラ名詞アクセントの変遷」(『国語学』140集　武蔵野書院)